

知って遊んで 矢上川



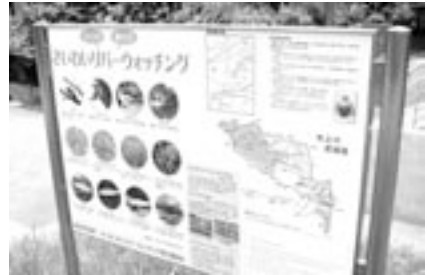
矢上川で遊ぶ会

矢上川流域ようこそ	3
矢上川流域マップ	4～5
矢上川で遊ぶ会の活動紹介	6～9
ミクリわんどの活動紹介	10～11
環境学習・地域との連携	12
水の不思議	13
矢上川下流周辺の見どころ	14～15
矢上川の自然 植物	16～19
水の中の生きもの	20～23
鳥	24～27
データ集	
植物	28
魚	29
鳥	30
川辺にひろがる外来種	31
矢上川の歴史 ～矢上川は見てきた～	32～35
矢上用水のこと	36～41
川の思い出～鶴見川で思い出すこと	42～43
矢上川の洪水と治水	44～46
川の豆知識	47
矢上川で遊ぶ会 活動記録・受賞歴	48
編集後記	49

矢上川のパネル紹介



鷹野大橋左岸



矢上橋左岸下流



五反田橋左岸上流



上野川橋左岸上流

ご協力いただいた方々 ありがとうございました。

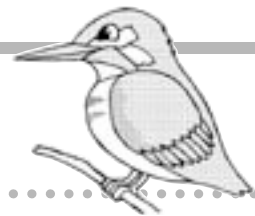
加藤茂さん・新堀安一さん・松岡貞吉さん・細谷保治さん・佐藤晶一さん・宮崎敏行さん

京浜河川事務所新横浜出張所 所長 上林喜美夫さん・鶴見川流域ネットワーク

データ提供：国土交通省京浜河川事務所・新横浜出張所・飯田文男さん・

石川日出朗さん・佐藤真一さん





矢上川流域にようこそ

矢上川は、鶴見川の支川で、源流は、宮前区水沢ですが、現在は枝谷戸と呼ばれた犬蔵の宮前美しの森公園が源流といえます。南下しながら、五反田橋付近で有馬川、井田で江川、中原区と幸区の境で渋川と合流します。ここで大きく曲がり、幸区・港北区の境界を抜けて鷹野大橋で鶴見川と合流する、全長約13km、流域面積25.2km²の川です。

流域とは、降った雨が一つの川に流れこむ地域（窪地）のことをいいます。流域の殆どは市街地で約97%を占めます。一時期は市街地からの生活排水で水質が悪化し、いままで住んでいたアユもいなくなりました。しかし、下水道施設の完備にともない年々水質はきれいになり、アユや魚たちも戻ってきました。

市街化が進んだため、矢上川の大半は、兩岸、川底の三面がコンクリートで固められて典型的な都市河川となっており、湧水が少なくなり、川を流れる水は減っています。そしてまた、流れで運ばれる土砂が減少しています。

しかし、矢上川の下流約2kmの区間、鶴見川との合流地点までは、上流から運ばれてきた土砂などが堆積して出来た河川敷が残されていて、植物や生きものたちのすみかとなっています。そして、そこが私たち「矢上川で遊ぶ会」の主なフィールドです。子どもたちと魚とりをしたり、鳥・植物の観察会、クリーンアップと、四季折々に取り組みを展開しています。

いくつか矢上川流域でおこなわれている取り組みをご紹介します。

●鶴見川流域水マスタープランと矢上川

2004年、鶴見川流域水マスタープランの策定とともに、矢上川流域では「よみがえれ!矢上川（矢上川再生プラン）」が出来、川崎市による上野川橋上流の河床の底はがしによる多自然化や、防災拠点づくりなどが進められました。神奈川県により、五反田橋に魚道が出来、そこから矢上川上流部の生きものたちは賑やかになっていきました。

●協働の取り組み

秋には流域クリーンアップを実施。源流公園、上流域の上野川橋、五反田橋、井田、鶴見川との合流点近くと流域中のあちこちでさまざまな団体がクリーンアップを行っています。

●流域紹介のパネルの作成

矢上川の上野川橋付近（川崎市設置）、五反田橋付近（神奈川県設置）、矢上橋付近（幸区設置）、鷹野大橋付近（幸区設置）に、流域紹介パネルがそれぞれ設置され、散策する人たちに川を知ってもらおうきっかけになっています。私たちも提案し、設置をはたらきかけました。左のページに、各パネルを紹介しています。

矢上川流域付近には次ページのマップのように、多くの自然や歴史遺産などがあります。すべてを語り尽くせませんが、下流域を中心にとり上げ、そして、その中で生きものや自然に親しむ活動をしている私たち「矢上川で遊ぶ会」の取り組みの成果をご紹介します。この冊子を作成しました。

この冊子をお読みいただいた皆さまが、矢上川に親しむ際にお役に立てば幸いです。

作成に当たりましては多くのみなさまに多大のご協力を頂きました。厚くお礼申し上げます。

矢上川で遊ぶ会代表 庄司佳子

KAMO
DA~



田園都市線

第三停車場

長時代の市内名刹。いかにこの街が栄えり

花影の寺

花影の寺

花影の寺

花影の寺

花影の寺

花影の寺

花影の寺

花影の寺

花影の寺

花影の寺

花影の寺

花影の寺

花影の寺

花影の寺

花影の寺

又文寺

新成公園

新成神社

新成神社

新成神社

新成神社

新成神社

新成神社

新成神社

新成神社

新成神社

新成神社

新成神社

新成神社

新成神社

新成神社

新成神社

新成神社

新成神社

新成神社

新成神社

新成神社

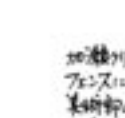
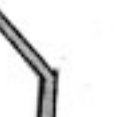
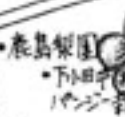
新成神社

新成神社

新成神社

新成神社

新成神社



地F130mの
雄大な紅葉は
ユキ色
のコントラスト

花影の寺

花影の寺

花影の寺

花影の寺

花影の寺

花影の寺

花影の寺

花影の寺

花影の寺

花影の寺

花影の寺

鹿島製菓
下田子
パンジ牧場の盛ん

鹿島製菓

鹿島製菓

鹿島製菓

鹿島製菓

鹿島製菓

鹿島製菓

鹿島製菓

鹿島製菓

鹿島製菓

中原街道

時習学校跡

国際交流センター

国際交流センター

国際交流センター

国際交流センター

国際交流センター

国際交流センター

国際交流センター

国際交流センター

国際交流センター

国際交流センター

国際交流センター

- イラスト
岩崎明子・庄司真梨子
庄司佳子
- 制作
矢上川で遊ぶ会
- 協力
矢上川流域ネットワーク

東横線

湘島街道

新幹線

カルガEm里
おみこ様

カルガEm里
おみこ様

カルガEm里
おみこ様

カルガEm里
おみこ様

カルガEm里
おみこ様

カルガEm里
おみこ様

カルガEm里
おみこ様

カルガEm里
おみこ様

カルガEm里
おみこ様

カルガEm里
おみこ様

カルガEm里
おみこ様

カルガEm里
おみこ様

カルガEm里
おみこ様

カルガEm里
おみこ様

カルガEm里
おみこ様

ビュポイント
ランドマーク、熊持寺の
屋敷の見える



鹿島製菓
下田子
パンジ牧場の盛ん

鹿島製菓

鹿島製菓

鹿島製菓

時習学校跡

国際交流センター

国際交流センター

国際交流センター

国際交流センター

国際交流センター

国際交流センター

カルガEm里
おみこ様

カルガEm里
おみこ様

カルガEm里
おみこ様

カルガEm里
おみこ様

カルガEm里
おみこ様

カルガEm里
おみこ様

カルガEm里
おみこ様

カルガEm里
おみこ様

カルガEm里
おみこ様

カルガEm里
おみこ様

カルガEm里
おみこ様

カルガEm里
おみこ様

カルガEm里
おみこ様

カルガEm里
おみこ様

カルガEm里
おみこ様

カルガEm里
おみこ様

ビュポイント
ランドマーク、熊持寺の
屋敷の見える



鹿島製菓
下田子
パンジ牧場の盛ん

鹿島製菓

鹿島製菓

鹿島製菓

時習学校跡

国際交流センター

国際交流センター

国際交流センター

国際交流センター

国際交流センター

国際交流センター

カルガEm里
おみこ様

カルガEm里
おみこ様

カルガEm里
おみこ様

カルガEm里
おみこ様

カルガEm里
おみこ様

カルガEm里
おみこ様

カルガEm里
おみこ様

カルガEm里
おみこ様

カルガEm里
おみこ様

カルガEm里
おみこ様

カルガEm里
おみこ様

カルガEm里
おみこ様

カルガEm里
おみこ様

カルガEm里
おみこ様

カルガEm里
おみこ様

カルガEm里
おみこ様

矢上川で遊ぶ会 活動紹介



.....
矢上川の自然を大切にし、川に親しむ取り組みをしています。

1996年に始まった矢上川の活動は、最初はクリーンアップが中心でしたが、自然観察や体験型取り組みを増やし、今は

- ①毎月第2土曜日に定例で行う「ミクリわんどのクリーンアップと生きもの観察」
- ②季節ごとの取り組み(年間7~8回程度)
- ③環境学習支援(依頼に応じてその都度・年3~5回程度)を行っています。

私たちは、子どもと大人が自然や、生きものの営みに触れることで、感じ、学ぶことができる場を作って行きたいと思い、活動しています。また、川の中の活動では、ライフジャケットの着用のほか、スタッフが必ず見守り、安全に活動できるように準備しています。

●矢上川の四季の取り組み (詳しい日程等は、お問い合わせください)

4月	野草観察会	10月	矢上川クリーンアップとハゼ釣り
5月	ウナギ観察会	11月	エコツアー 流域めぐり
6月	矢上川クリーンアップ	12月	冬の鳥調査
7月	夏の生きもの調査	3月	日吉分館さくらフェスタ日吉出展

春 ... 野草観察と野草の天ぷら

- ・場所 矢上橋周辺の河川敷
- ・川辺の野草の特徴について学びます

野草の小さな花や実などを、ルーペで観察すると、見すごしがちな花のつくりやめしべ、おしべの役割、実の形などに驚かされます。

植物がどのように成長するのか、花が咲いた後、種をどのようにして広くまくのかなど、興味ぶかいことばかりです。

観察の後、食べられる野草をつみ、天ぷらにして試食します。野菜嫌いな子どもも、この時ばかりは「おいしい!」と喜んでいきます。(詳しくは16~17ページに)



夏 … 矢上川夏の生きもの調査

・場所 矢上川と渋川合流点

・親子で川に入り、みんなで魚とりをします。「追い込み漁」といって、長いアミをみんなで持って、川の中を引きずりながら魚を追い込んだり、「投網(とあみ)」の実演を見たり、一人ひとりアミで川岸に設置した「ボサ」の草むらや、石の下にいる魚を探します。最後に、とれた魚を観察し、また川に放します。「ボサ」とは、竹や木の枝をたばねたもので、何日か川の中に沈めておくと魚たちがかくれたりするようになります。それを利用して、魚をとります。



投網がまるく開いた!!



魚が採れたよ



子どもたちも観察会が大好き

秋 … 矢上川クリーンアップ作戦

・場所 矢上橋から鷹野大橋までの区間を何回かに分けてクリーンアップします。

・地域の子どもの団体や加瀬クリーンセンターの職員の親子も参加して川の兩岸をいっせいにきれいにします。

川辺に近づくことで、川辺の植物や昆虫などにも触れることが出来ます。生きものを育む川の様子を見てもらう大事な機会でもあります。

秋のクリーンアップの後は鶴見川でハゼ釣り大会をします。初めて釣りをする人もたくさんいます。みなさん、川風に吹かれながらじっくり楽しんでいます。



・年々ごみが少なくなっている気がします。
・きれいになって気持ちよかったです。
・いろいろな昆虫や野草の花が咲いていたよ。

冬 … 冬の鳥調査

・場所 新矢上橋(綱島街道にかかる橋)～鷹野大橋

・川辺をゆっくり歩きながら、周囲に見える鳥の種類と数をカウントします。鶴見川流域ネットワークが主催する調査で、毎年、鶴見川流域の各地で行われる取り組みです。矢上川で遊ぶ会も1996年から参加しています。

鳥の名前や特徴、どんなところにいるかや鳴き声なども知ることができます。



矢上川で遊ぶ会 活動写真集



矢上川生きもの調査(夏)



ウナギ観察会(春)



ミクリわんどの定例会(通年)



ハゼ釣り大会



野草観察会(春)



冬の鳥調査



ミクリわんど定例会(草刈り)



クリーンアップ



クリーンアップ(加瀬クリーンセンターでまとめの会)



ミクリわんどの活動

さあ、出かけよう！鷹野大橋下はワンダーランド

ポイント① 橋の下にある「わんど」

鶴見川と矢上川の合流点にかかる鷹野大橋の左岸下に、小さなわんどがあります。

わんどとは、川のそばに出来た小さな入り江、よどみのこと。その中に、貴重な植物となったミクリが自生しています。

矢上川で遊ぶ会はここを定例活動の場所とし、毎月第2土曜日午前にクリーンアップと生きもの観察を実施し、保全しています。



ポイント② 汽水域

海水と淡水(川の水)が混じりあう水域を「汽水域」といいます。汽水域には、海や川の生きものが多様に暮らしています(矢上川では、矢上橋付近まで)

矢上川河口でとれるスズキ、ボラ、コトヒキのほか、たくさんの種類のハゼなどが、汽水域に多く見られる魚です。



ポイント③ カニの楽園

矢上川と鶴見川の合流地点には、土の堆積した土手とアシ原が広がっています。川辺の土手のあちらこちらにあるたくさんの穴、これはクロベンケイガニの巣穴です。

湿った泥っぽい場所を好む性質のカニで、この一帯にたくさんのクロベンケイガニ、ベンケイガニが住んでいます。また、モクスガニが石の下などにかくれて暮らしています。



ポイント④ ウナギ観察会

5月ごろの大潮の干潮時、鷹野大橋の対岸にある綱島ポンプ場の前あたりでは、川底があらわれます。川底にあるコンクリート片の下に、多数のウナギが暮らしています。大きささまざまなウナギは、見つかるたびに砂にもぐってしまいますが、みんなで協力して採って観察をします。

おもしろいウナギの生態に、子どもも大人も感動しています。





ポイント⑤ イワツバメ

春になると、鷹野大橋の橋げたには、イワツバメが巣をつくります。橋の上からみていると、ピューンと飛んで橋の下にかくれ(ヒナにエサをあげているのかな?)、また飛び出してくることを何回となくくりかえしています。

定例活動

①クリーンアップ

橋の下はごみがたまりやすい場所。橋の上や近くを通るマナーの悪い人が捨てたごみが目立ちます。このほかに、毎日2回上下する潮が満潮になるときに、川のなかのごみを置いていきます。それらのごみをクリーンアップしています。

秋のクリーンアップは、矢上橋～矢上川橋をしますが、その後には鷹野大橋付近でハゼ釣り大会も行います。マハゼやスズキがつかれます。



②生きもの観察

魚やエビ・カニなどをとって、観察します
マハゼ・アベハゼ・ウロハゼ・ボラ・スズキ・コトヒキ・ウナギ・クロベンケイガニ・ベンケイガニ・モクズガニ・チゴガニ・テナガエビ・ミゾレヌマエビなど

植物では・・・

ミクリ・アシ・マコモ・ジュズダマ・チカラシバなどを見ることができます。



ミクリとは

抽水植物といって、水の中に根を生やす植物で、葉は柔らかいスポンジ状のベルトの形。

雄花と雌花があり、地下茎で広がります。北海道から九州、アジアに分布する植物で、実が栗に似ていることから命名されました。

葉の断面が三角形で先端は丸いのが特徴です。かつてはどこでも生えていましたが、今では貴重種となっています。ミクリが生えるところは水生昆虫も住みやすいところです。

春:芽がでる 7月ごろ:花が咲く 7～9月ごろ:実がなる 秋:枯れる



環境学習・地域との連携

会内にとどまらず、地元の学校や団体と協力して活動しています。

●環境学習の取り組み

矢上川で遊ぶ会では、会の発足当初から地元小学校の環境学習に協力してきました。学校に出向いての生きものや活動の話のほか、川辺での魚とり体験や川辺の植物や生きものなどの学習を支援しています。その取組が認められ、「川崎市環境功労者表彰」、「コカ・コーラ環境教育賞奨励賞」をいただきました。

地域を流れる川には、いろいろな面から子どもたちの学びの素材がつまっています。川の自然、生きものや水とのつながり、治水や歴史などの観点からみても、子どもたちにぜひ関心をよせてもらい、楽しみながら、自然から学んでほしいと思っています。

●日吉のわッ実行委員会への参加

矢上川で遊ぶ会は、幸区の日吉地区で活動する市民団体が構成するネットワーク「日吉のわッ実行委員会」でも活動しています。日吉地区(幸区南加瀬・北加瀬・小倉・鹿島田・新川崎)のタカラモノを次世代に伝えていくことを目的にして、2007年に発足し、幸区との協働事業を展開しています。地域の子育て・遊び場・歴史・自然系・語りのグループなどが参加しています。

日吉のタカラモノガイドパネルの設置や日吉のタカラモノマップや「日吉のタカラモノかるた」を作成のほか、地域の世代間交流会を目的とした「ひと月遅れのお正月」やエコツアーなどのイベントを実施しました。

●鶴見川流域ネットワークに参加

鶴見川流域で活動する団体が構成する鶴見川流域ネットワークと連携して小学校の学習支援などを行っています。また、「バクの流域スタンプラリー」拠点の一つにもなっています。矢上川流域では、矢上川の源流域や中流域で活動する団体とも連携しています。



日吉分館「さくらフェスタ日吉」で水族館展示



さいわいふるさと公園でイベント



エコツアー

水の不思議

とても身近な水ですが、実は不思議がいっぱいなんです。

●いのちを育む水

水は、私たちが生きていくのに欠かせない大切なものです。

私たち人間の体は、胎児で体重の約90%、新生児で約75%、子どもで約70%、成人では約60～65%、老人では50～55%が水で満たされています。



●姿を変える水・かくれた水

自然界には、水はどこにあるでしょうか？

水蒸気・雲・雨・川・海・氷(氷河)・地中深くにいる水・岩の中に閉じ込められた水・生きものの体の中にある水・・・水は、自然界では個体・液体・気体と姿を変え、さまざまなところにあります。

地球上には13億3800万km³の水があります。その内訳をパーセントで表示すると上のようになります。地球の水のほとんどは海です。残りの大部分は氷河や地中深いところにある地下水として閉じ込められています。私たちがすぐ使うことができる川の水や地下水は、地球上にあるすべての水のたった0.01～0.02%ほどだといわれています。

●矢上川の水質

下水道の普及とともに、河川に流れ込む工場や家庭からの排水は少なくなり、水質は年々きれいになっています。しかし、空中に浮遊していた、あるいは路面に落ちた汚染物質が雨の降りはじめに下水や河川などに流れ込むノンポイント汚染は、大きな問題になっています。

※1975年以前、矢上川橋でBOD75%値35～65mg/ℓと大変汚れていましたが、2003年には、BOD75%値5mg/ℓ以下となっています。(鶴見川支川におけるBODの経年変化:国土交通省京浜河川事務所) BODとは、生物化学的酸素消費量とも呼ばれる最も一般的な水質指標のひとつであり、値が小さいほど水質は良いといえます。

●矢上川の流量

下水道の普及によって、流量は年々減少しています。毎分約1.5m³だった1990年に比べ、2011年には毎分約0.5m³と約1/3に減ってきています。(川崎市環境基本計画年度報告書2012年度版)

●下水処理場のしくみ

私たちは、水を一日一人約235リットル(川崎市2012年度)使っています。使った水は、下水処理場で沈殿させたり、バクテリアの力できれいにして川に戻されています。

- ★あなたの家の飲み水は、どこから来ていますか？
- ★あなたの家で使った水は、どこの処理場に行きますか？
- ★その処理水は、どの川に流れていきますか？

矢上川下流周辺の見どころ

さあ、歩いて見つけてみよう。

①日吉台地下壕

戦時中の旧海軍の極秘地下施設跡で、予約すれば見学も可能です。

②渋川との合流点

多摩川の水をひいたニヶ領用水が渋川経由で矢上川に注ぎ込んでいます。

③ミニ紫陽花ロード

数年前から植えられた紫陽花も6月になると色とりどりに咲き、見事です。

④鎌倉街道

鎌倉・室町戦国時代の主要道路で、平間から北加瀬の高札場(A)を過ぎ矢上橋付近を通っていました。(B)にあった道標は、今は新幹線ガード下(C)にあります。

⑤喫茶シンフォニー

落ち着いた雰囲気のカフェで昭和60年代にオープン。おいしいコーヒーにランチも豊富です。矢上川の観察会の拠点です。

⑥杉崎いちじく園

以前は柿、桃畑もありましたが、昭和30年代からいちじくを栽培し、今では「日吉のいちじく」として有名。予約販売もしています。

⑦細谷さんの野菜

四季折々の新鮮野菜を栽培、販売しています。以前はこの近くを矢上用水が流れていました。

⑧加瀬水処理センター

川崎市内幸区・中原区・高津区・宮前区の一部の下水を浄化処理し、矢上川に放流しています。屋上は「加瀬ふれあいの広場」という公園です。

⑨加瀬クリーンセンター

ごみの中継施設。圧縮して大型車に移し替え、浮島処理センターに輸送しています。職員は、矢上川のクリーンアップなどにも参加する心強い味方です。

⑩矢上橋

鎌倉古道が通ってました。橋のたもとに橘郡日吉村村役場がありました。

⑪八兵衛橋

川をまっすぐにした時に、田畑が対岸になってしまった八兵衛さんが架けたとされています。

⑫一本橋

1本の丸太を縦に半分に切って、平らな面を並べて橋としたのが名前の由来です。

⑬鷹野人道橋

昔は、ここにもっと低い位置で木の橋が架けられていました。大水の時には、時々流されたそうです。この次の鶴見川下流の橋は、末吉橋でした。

以下については、矢上川の歴史のページを参照してください。

- ⑭鷹野大橋 ⑮矢上古墳 ⑯観音松古墳 ⑰矢上城 ⑱保福寺 ⑲観音寺
⑳白山古墳・第六天古墳 ㉑袋河岸 ㉒樋橋 ㉓泉水掘





矢上川の自然



矢上川の大半は、兩岸、川底の三面がコンクリートで固められた典型的な都市河川です。その中で、矢上川の下流約 2km の区間、鶴見川との合流地点までは、上流から運ばれてきた土砂などが堆積して出来た河川敷が残されていて、植物や生きものたちのすみかとなっています。

川の中では、瀬や淵、わんどなどが形成され、それぞれにその環境にあった生きものの産卵やエサ取り、あるいは身を隠す場所となっています。

一方河川敷には色々な植物が育ち、その中を昆虫たちが飛び交います。これら植物の実や種、集まってくる昆虫、さらに川の中の魚たちを求めて、鳥や八虫類たちが集まってきます。

矢上川の植物

矢上川で遊ぶ会は、毎年春に矢上橋付近で春の野草を観察しながら、食べることのできる野草をつんで天ぷらにして楽しんでいます。

鷹野大橋の下にあるミクリわんどの中には、準絶滅危惧種のミクリという植物が生えています。私たちはこの植物の保全活動を 10 年近く続けてきました。

これらの活動の間に私たちが確認した植物は、約 150 種に及びます。年間を通して調査していないので、実際はもっと多いはずです。

●調査記録のまとめ

科名	種類数	科名	種類数	科名	種類数	科名	種類数
キク科	24	ナデシコ科	6	オオバコ科	2	フウロウ科	2
イネ科	21	シソ科	4	ガマ科	2	ヒガンバナ科	2
タデ科	11	ユリ科	3	キンボウゲ科	2	ヒルガオ科	2
アブラナ科	10	セリ科	2	ツユクサ科	2	ウリ科	2
マメ科	7	ゴマノハグサ科	2	トウダイグサ科	2	ナス科	2

[以下は全て 1 種]

アサ科、アリノトウグサ科、イグサ科、イラクサ科、キキョウ科、クマツツラ科、スミレ科、トクサ科、ヒユ科、ミクリ科、ムラサキ科、ヤマノイモ科、ヤマゴボウ科

●はびこる外来種

今までの調査をまとめた結果、特に目立つのは外来種の多さ。確認できた種の約半数に当たる 77 種が外来種でした。その主な原因は次のようなことではないかと考えられます。定期的な草刈りで新しい種類の植物が入りやすい環境であること、人家が近く園芸種等がすぐ野生化するなどです。

中にはその旺盛な繁殖力で、在来植生の脅威になるものもあり、今後の対応のしかたが、課題です。今、矢上川を含む鶴見川流域では、その対応の模索が行われています。

●よく見てごらん

いつも何気なく見ている「雑草」と呼ばれる野草。しかしその中には、ルーベなどでよく観察してみると、花びらの形や模様、種の形やつき方など驚きの世界が広がります。

アカバナユウゲショウ、オオアラセイトウ、オオイヌノフグリ、カラスノエンドウ、
セイヨウカラシナ、セリバヒエンソウ、ヒメオドリコソウ、ヘクソカズラ、ホトケノザ、
ムラサキケマン、ヤブカンゾウなど

●食べたことのある野草

矢上川の春の息吹を感じることができる野草です。天ぷらにして美味。

イタドリ、オオアラセイトウ、カラスノエンドウ、スイバ、セイヨウカラシナ、ツクシ、
タンポポ、ノビル、ハコベ、フキ、ヤブカンゾウ、ヨモギ

●食べてはいけない毒のある野草

主にキンポウゲ科：キツネノボタン、セリバヒエンソウ、センニンソウなど
その他の科：トウダイグサ、ブタクサ、ムラサキケマン、ヨウシュヤマゴボウ、ワルナスビ

●おもしろい名前

なぜそんな名前になったのか、ぜひ一度その由来を調べてみてください。

☆鳥や動物の名前をつけたもの

イヌガラシ、エノコログサ、オオイヌノフグリ、カラスウリ、カラスノエンドウ、
カラスムギ、キツネノボタン、スズメノエンドウ、スズメノカタビラ、ネズミホソムギなど

☆かわいそうな名前がついているもの

オオイヌノフグリ、ノボロギク、ハキダメギク、ヘクソカズラ、ヤブジラミなど

●河川敷の樹木

矢上川の河川敷には樹木も生えています。種や実、苗が川を流れて運ばれてきたものや、鳥によつて運ばれてきたものと考えられます。

オニグルミ、カキ、カジイチゴ、クコ、サクラ、シュロ、タチヤナギ、トウネズミモチ、
ノイバラ、ハナモモ、ビワ、モモなど

●ひっつきむし

河川敷を散策すると必ずスボンや服にくっついてくる厄介者、いわゆる「ひっつきむし」。

しかしこれは植物たちの懸命な、繁殖戦略のひとつなのです。人や動物にくっつき、できるだけ遠くに運ばれて、また新たな地で子孫を増やす作戦です。以下は矢上川で見られる主な「ひっつきむし」。

アメリカセンダングサ、アレチヌスビトハギ、イノコヅチ、オナモミ、ヤブジラミ、
チカラシバなど



植物 写真集



ミクリ



ヒルガオ



ハルジオン



ハルノゲシ



ヘクソカズラ



オギ



ムラサキケマン



センニンソウ



ジュズダマ



トウダイグサ



コオニタビラコ



セリバヒエンソウ



ヒガンバナ



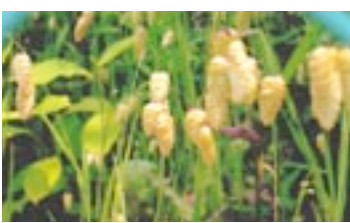
オオイヌノフグリとヒメオドリコソウ



セイヨウタンポポ



ナズナ



コバンソウ



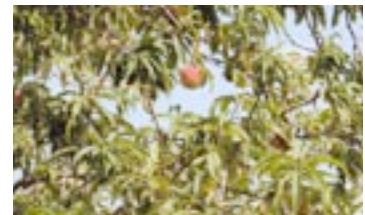
カキ



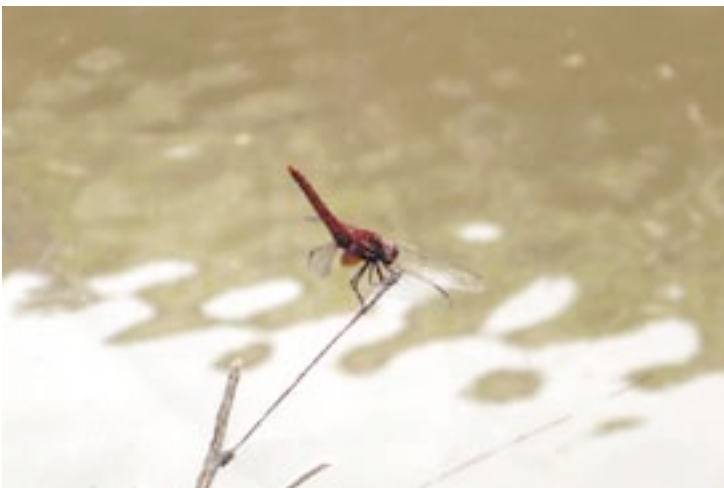
クコ



オニグルミ



モモ



ショウジョウトンボ



セセリチョウ



ベニシジミ

矢上川の水の中の生きもの

都市化が激しい鶴見川流域の中でも一、二を争う矢上川流域。高度経済成長時、昭和30年代後半から川には工場排水、家庭排水が流れ込み、水は白くにごり、川底にはヘドロが堆積しました。水質悪化で川の中の生きものは激減しました。

その後、下水道の整備が進み、水質はよくなり、姿を消した生きものたちが戻ってきました。矢上川で遊ぶ会が、16年間、調査・観察してきた水辺の生きものをまとめました

☆矢上川の下流域の魚たち

魚名	科	生息域	魚名	科	生息域	魚名	科	生息域
アベハゼ	ハゼ	下流	カマツカ	コイ	中下流	アユ	アユ	全域
ウキゴリ	ハゼ	中流	コイ	コイ	全域	ウナギ	ウナギ	全域
ウロハゼ	ハゼ	汽水	タモロコ	コイ	中下流	カレイ	カレイ	汽水
泥刀ハゼ	ハゼ	汽水	ニゴイ	コイ	中下流	カダヤシ	カダヤシ	中下流
スミゴリ	ハゼ	全域	フナ	コイ	全域	クサフグ	フグ	汽水
チチブ	ハゼ	下流	モツゴ	コイ	全域	スズキ	スズキ	汽水
双灯ナギ	ハゼ	下流	コトヒキ	フナ科	汽水	ドジョウ	ドジョウ	全域
ピリンゴ	ハゼ	中下流	フナ科	フナ科	汽水	ナマス	ナマス	中下流
マハゼ	ハゼ	下流・汽水	ブラッガス	サワウシ	下流	メダカ	メダカ	全域
オイカフ	コイ	全域	ブルギル	サワウシ	下流	ボラ	ボラ	下流・汽水

●ハゼ

矢上川で確認されているハゼは9種類。鶴見川全域では33種類確認されています。矢上川では、ウキゴリ、スミウキゴリのように上流・中流に多いもの、ウロハゼ、マハゼのように汽水域で過ごすことの多いものに分かれています。アベハゼのようにヘドロでも平気なものもいます。一般的にハゼの仲間は、砂地をはい回りエサを探したり、おなかのヒレを吸盤のようにして、防波堤や杭などにつかまったりしています。産卵期には砂地に巣穴をほったり、岩などの隙間に巣をつくるものもいます。中には空き缶を利用するものもいます。

●アユ

「清流の女王」と呼ばれるアユが数十年ぶりに矢上川に帰ってきました。2002年に矢上川でアユを確認し、その時「矢上川はよみがえった」と強く思いました。その後、毎年夏から秋にかけて、矢上川のあちらこちらで群れ泳ぐアユが確認されています。宮前区上野川橋付近では産卵も確認され、繁殖していることがわかります。



アユは漢字で「年魚」とも書かれるように、1年で一生を終えます。晩秋から初冬に卵からかえり、海に下りていきます。晩春から初夏にかけて、再び川に戻ってきて、川をさかのぼります。夏には中流から上流で暮らし、ある一定の大きさになると縄張りを持ちはじめ、秋に産卵をしてその一生を終わります。

●ウナギ (2013年1月 絶滅危惧種に指定)

日本から約2000km南にあるマリアナ諸島の近海で、最近ウナギの卵が発見されました。これにより、長年ナゾとされてきたウナギの産卵場所が明らかになりました。

ここで卵からかえったウナギの稚魚は、約200日かけて日本の近海に泳ぎつきます。このころは「シラスウナギ」と呼ばれ、その多くは漁師に一網打尽にされ養鰻場に行きます。うまく逃げ切ったウナギがその後川に入り、川底の石の下や、深い淵に身を沈めてすごし、やがて産卵期を迎えると、再び生まれた海に半年かけて戻っていくといわれています。

矢上川で遊ぶ会では、毎年ゴールデンウィーク前後にウナギの観察会を実施しています。



●エビ・カニ類

・テナガエビ

真水と潮が混じる汽水域から川の中流域に生息し、オスのハサミが長く発達し大きくなるのが名前の由来。矢上川では鷹野大橋から渋川との合流点の間で見ることができます。

・ミゾレヌマエビ

川の汽水域から中流に生息し、近年ペットショップで魚のエサとして販売されています。矢上川では鷹野大橋付近で見られます。

・アメリカザリガニ

1927年に鎌倉にウシガエルのエサとして輸入されましたが、日本の環境に順応し瞬く間に日本全国に生息域を広げました。矢上川でも全域で見られます。

・クロベンケイガニ・ベンケイガニ

汽水域に生息し、名前の由来はいくつかあります。甲羅の様子が昔の武将弁慶の顔に似ている説と、足に生えている剛毛が、弁慶のスネ毛に似ている説が有力。夏の大潮の夜に産卵（放仔）活動を行います。

矢上川では鷹野大橋付近に多く生息しています。

・モクスガニ

海で生まれて川をさかのぼり、かなり上流まで行くものもいて、矢上川でも全域で見られます。

クロベンケイガニ (イワガニ科)



大きさ、甲羅の幅 4cm

- ・甲羅の足に黒くてかたい毛がたたくはんはえている。
- ・ハサミにぶつぶつがある。
- ・濡った場所や穴を好んで歩く。
- ・川の下流でよく見られる。

★ポイント★

- ・鷹野大橋の下でよく見られる。
- ・小ぶりは泥の穴にかくれている。穴の直径は 4~5cm。
- ・時々穴から出てくるのでつかまえられる。
- ・鷹野大橋近くのアシ原でガサガサ音がするのほ、教員近の方が動き出すからである。

ベンケイガニ (イワガニ科)



大きさ 甲羅の幅 3.5cm

- ・特徴は、甲中の刺半分とハサミが赤い。
- ・ハサミの外側にぶつぶつがある。
- ・河口近くの湿地などにいる。
- ・アキテガニとよく似ているが、ベンケイガニの目の横にむらさき色の線がある。

★ポイント★

- ・顔が赤い。ハサミをふり上げて身が赤い。ぶつぶつポーズをとる。



- ・穴の場所
- ・小川沿いの川にいます。



●両生類

アズマヒキガエル、ウシガエル、トウキョウダルマガエルなどが見られます。

●八虫類

イシガメやクサガメは矢上川下流域で、ミシシippアカミミガメは中下流域で、スッポンも中流で観察できます。たまにアオダイショウが川の中を泳ぐ姿も観察できます。

●ヤゴ

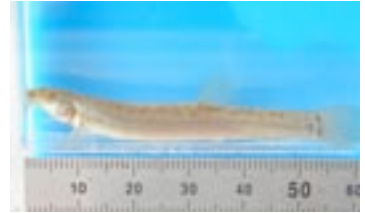
イトトンボ、ハグロトンボ、シオカラトンボ、ギンヤンマ、オニヤンマ、アカネ類のヤゴも矢上川では観察できます。



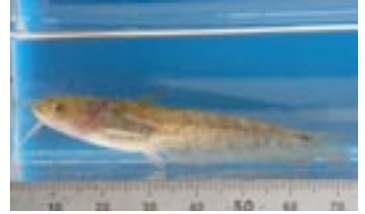
魚 写真集



アユ：初夏から秋に全域にいる



ドジョウ：全域にいるが中流域に多い



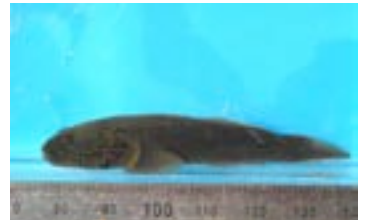
ナマズ：中流、下流にいる



アベハゼ：鷹野大橋付近にいる



シモフリシマハゼ：鷹野大橋付近にいる



ヌマチチブ：上流・中流にいる



コイ：全域にいる



スズキ：鷹野大橋付近にいる



スミキゴリ：全域にいるが上流に多い



オイカワ：上流から下流までいる



メダカ：全域にいる



ウナギ：下流域にいる



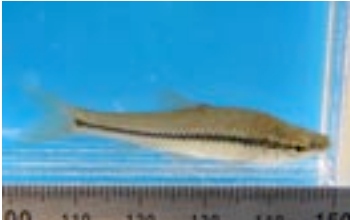
ホトケドジョウ：源流のピオトープで保全



ボラ：中流から鷹野大橋で見られる



ベンケイガニ：鷹野大橋付近にいる



モツゴ：中流から下流にいる



モクズガニ：全域にいる



クサガメ：下流から鷹野大橋にいる



テナガエビ：下流から鷹野大橋にいる



クロベンケイガニ：鷹野大橋付近にいる



ミシシippアカミガメ：中流・下流にいる



マハゼ：下流域にいる



アオダイショウ：中・下流域にいる



ウシガエル：鷹野大橋付近にいる

矢上川の鳥

水があって、野草があって、樹木があって、そんな環境だといろいろな生きもののにぎわい、野鳥にとっても天国です。1996年から毎年12月に矢上川下流部の冬の鳥調査を実施してきました。確認できた鳥の種類は、70種あまり。たまたまその日に現れなかったり、冬以外に飛来する鳥を加えると、かなりの数にのぼります。

●観察記録からの考察

・矢上川に多い鳥 ベスト10

- ① スズメ ② ドバト ③ ユリカモメ ④ カラス ⑤ ヒヨドリ ⑥ コガモ
⑦ ハクセキレイ ⑧ カワラヒワ ⑨ ムクドリ ⑩ カルガモ
(1996～2012年の調査のトータル)



・増えた鳥・減った鳥

16年の間にいくつかの増減はありますが、概して大きな変化は見当りません。しいて言えば、ヒヨドリが増え、ほとんど見る事のなかったアオサギが現れ、オオバンが2008年から毎年確認できました。

一方、2003年まで群れで見られたカワラヒワが時々見る程度に減ってしまいました。世間ではスズメ、ツバメ、カモが減っているという報告もありますが、わたしたちの調査では大きな変化は出ていません。

・川辺の観察に適したカモ類

冬の鳥調査で最も目を引くのがカモ類。日本に飛来する冬の時期は、ちょうど繁殖期です。オスは鮮やかで、きれいな婚姻色を出しているため、区別の目安になります。カモは体も大きく、視界が開けた水辺に浮かんでいて、動きもゆっくりしているので、観察には格好の「マト」になります。とくに矢上川の川幅は狭く、観察者と鳥の距離が近く観察に適しているようです。

・アユとカワセミの関連性

矢上川で遊ぶ会は、2001年に初めてカワセミを観察しました。その翌年からアユを確認。アユが復活するくらいに水がきれいになり、ほかの小魚も増え、それをエサにするカワセミも川に戻ってきたように感じます。



●川面をすれすれに飛翔するイソシギ

矢上川ではよく「ピーッ」というかん高い鳴き声とともに、川面を滑空していくグレーでお腹が白い鳥を見ることがあります。イソシギです。矢上川上流から下流で見かけます。昆虫が主食なので、矢上川には彼らが生きていけるだけの豊富な昆虫がいることの証明になります。

●都市空間で人工物をうまく利用する鳥たち

・マンションで営巣するチョウゲンボウ

鷹野大橋のそばのマンションに、ここ数年、チョウゲンボウの姿を見ることが出来ます。マンションの屋上周辺にすることが多く、高い塔の架台や鉄柵を樹木の枝がわりにして巣をかけているようです。鷹野大橋の周りには鶴見川と矢上川の河川敷が広がり、彼らの格好のえさ場になっているようです。



・鷹野大橋をねぐらにしたイワツバメ

イワツバメは本来断崖絶壁の穴などに営巣する鳥です。しかし鷹野大橋にもこのイワツバメが営巣し、繁殖しています。橋げたと橋脚の隅を絶壁の穴とみたてて巣をかけているようです。橋の下から出たり入ったりしているイワツバメの姿を見ることができます。また、橋の目の前に広がる河川敷や川面には、彼等がエサにする虫がすんでいて格好のエサ場になっているようです。

・下水処理場の放流口近くに集まるユリカモメ・カモ

一本橋と矢上川橋の間にユリカモメやカモ類が沢山群れている場所があります。なぜここにこんなに鳥たちが集まってくるのでしょうか？

そこは川崎市加瀬水処理センターからの放流口があります。この放流口からは、下水処理水が放流され、川の中の有機物がかき回され、それが小魚やエビ、カニなどのエサとなっています。また、この放流水は通常の川の水よりも温かく、寒い冬でも藻類が他の場所より繁殖しています。

これら小魚、エビ、カニ、藻類を求めてユリカモメやカモ類のキンクロハジロ、コガモなどが集まっています。



●活動の中で出会ったエピソード

・外来植物に順応したカワラヒワ

外来種としてここ30年ほどにわたり、河川敷にはびこり、在来の植物を駆逐してきた困り者の植物にオオブタクサという植物があります。この植物は花粉がアレルギーの原因物質のひとつとも言われ本当に困り者となっています。

しかし、この植物は、真冬に実をつけるので、一部の鳥たちにとってはエサの少なくなる季節の非常食にもなっています。ただし、この実は硬い殻の中にあるので、取り出すためには硬い殻でも平気で割る丈夫なくちばしを持った鳥でないと対応は難しいようです。その代表格がカワラヒワです。彼らは上手にこの硬い殻から実をついばんでいます。

矢上川の河川敷では真冬の少し暖かい日などには、オオブタクサに群がるカワラヒワをみかける事があります。

また、このオオブタクサはメイガというガの一種が食草にしており、真冬には、このガの幼虫がオオブタクサの茎の中で越冬しています。その幼虫を狙って、コゲラが飛来し、盛んにオオブタクサの茎をつついてる姿を見かけることがあります。

・矢上橋のアイガモとバリケン

矢上橋の川辺には2005年ころから羽の傷ついたバリケンがすみついていました。そしていつの頃からか、アイガモが一羽バリケンに寄りそって泳ぐようになりました。

アイガモもバリケンも人間が飼育用にカモから改良した交配種ですが、先祖を同じくする者同士、通じあうものがあったのでしょうか？



鳥 写真集



カワセミ



オカヨシガモ



カルガモ



イワツバメ



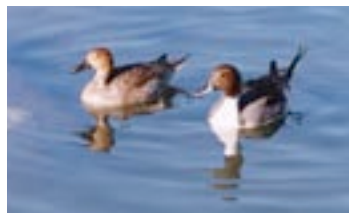
カイツブリ



マガモ



オナガ



オナガガモ



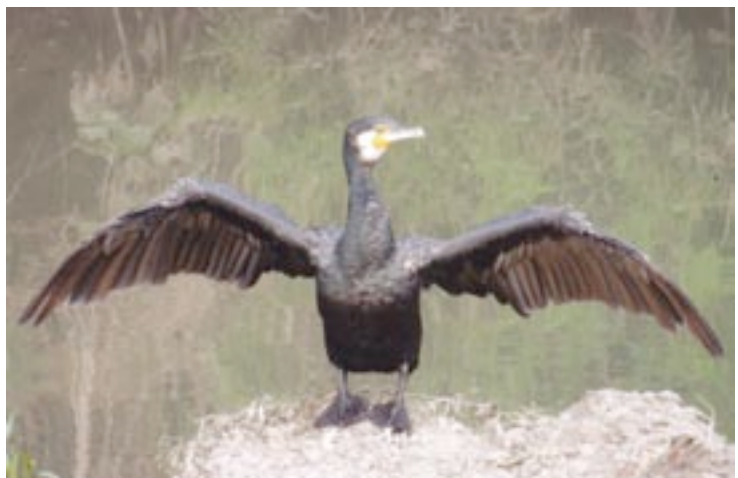
ホシハジロ



キセキレイ



ハクセキレイ



カワウ



モズ



カワラヒワ



チョウゲンボウ



ジョウビタキ



ツグミ



ホオジロ



コゲラ



オオバン



ムクドリ



ダイサギ、コサギ



アオサギ



ゴイサギ

矢上川の植物 (1996~2012)

1. 野草

科	植物名
アカザ	アカザ ケアタリソウ シロザ
アカバナ	アカバナユウゲショウ コマツヨイグサ マツヨイグサ
アカネ	ヘクソカズラ ヤエムグラ
アサ	カナムグラ
アブラナ	イヌガラシ オオアラセイトウ オランダガラシ キレハイヌガラシ セイヨウアブラナ セイヨウカラシナ タチタネツケバナ タネツケバナ ナズナ マメグンバイナズナ
アリノトウグサ	オオフサモ
イグサ	クサイ
イネ	アキノエノコログサ アシ イヌビエ イヌムギ エノコログサ オギ オヒシバ カラスムギ キシウスズメノヒエ ギョウギシバ クサヨシ ケイヌビエ コバンソウ シマスズメノヒエ ジュズダマ ススキ スズメノカタビラ スズメノヒエ セイバンモロコシ ナガハグサ ネズミホソムギ マコモ メヒシバ
イラクサ	カラムシ
ウコギ	ウド
ウリ	アレチウリ カラスウリ
オオバコ	オオバコ ヘラオオバコ
カタバミ	イモカタバミ オツタチカタバミ カタバミ ムラサキカタバミ
ガマ	コガマ ヒメガマ
カヤツリグサ	サンカクイ ノゲヌカスゲ メリケンカヤツリ

科	植物名
キキョウ	ミゾカクシ
キク	アカミタンポポ アメリカセンダングサ アレチノギク ウラジロチチコグサ オオアレチノギク オオオナモミ オオジシバリ オオブタクサ オナモミ オニタビラコ オニノゲシ ククイモ キツネアザミ コセンダングサ セイタカアワダチソウ セイヨウタンポポ ノアザミ ハハコグサ ハルジオン ハルノゲシ ヒメジョオン ヒメムカシヨモギ ヒロハホウキギク フキ ブタクサ ヨモギ
キンボウゲ	セリハヒエンソウ センニンソウ キツネノボタン
クズウコン	ミズカンナ
クマツヅラ	アレチハナガサ
ケシ	ナガミノヒナゲシ ムラサキケマン
ゴマノハグサ	オオイヌフグリ オオカワジシャ タチイヌフグリ フラサバソウ
シソ	キランソウ シロバナヒメオドリコソウ セイヨウジュウニヒトエ ヒメオドリコソウ ホトケノザ
スマレ	スマレ
セリ	オヤブジラミ セリ ハナウド ヤブジラミ
タデ	アレチギシギシ イタドリ イヌタデ エゾノギシギシ オオイヌタデ ギシギシ シャクチリソバ スイバ ナガバギシギシ ヒメツルソバ ヤナギタデ
ツククサ	ツククサ トキワツククサ

科	植物名
トウダイグサ	コニシキソウ トウダグサ
トクサ	スギナ
ナス	ヒヨドリジョウゴ ワルナスビ
ナデシコ	ウシハコベ オランダミミナグサ コハコベ ツメクサ ノミノツヅリ ハコベ
バラ	ヘビイチゴ
ヒガンバナ	ニラ ヒガンバナ
ヒユ	ヒナタイノコズチ
ヒルガオ	コヒルガオ ヒルガオ マアサガオ
フウロソウ	アメリカフウロ ゲンノショウコ
ブドウ	ヤブガラシ
マメ	アレチヌスビトハギ カラスノエンドウ コメツブツメクサ シロツメクサ スズメノエンドウ ヤブマメ
ミクリ	ミクリ
ムクロジ	フウセンカズラ
ムラサキ	キュウリグサ
ヤマゴボウ	ヨウシュヤマゴボウ
ヤマノイモ	ナガイモ
ユリ	オオアマナ ノカンゾウ ノビル ハナニラ ムスカリ ヤブカンゾウ

2. 樹木

科	植物名
ウルシ	ヌルデ
カキノキ	カキ
クマツヅラ	ムラサキシキブ
クルミ	オニグルミ
クワ	クワ
ナス	クコ
バラ	カジイチゴ クサイチゴ ノイバラ ナワシロイチゴ ハナモモ ビワ モモ
ブドウ	ノブドウ
マメ	ハギ クズ
モクセイ	トウネズミモチ
ヤナギ	タチヤナギ
ヤシ	シュロ

矢上川の生きもの調査記録

(2000~2012)[渋川合流点付近]

魚

2000.7.29	2001.7.28	2002.7.27	2003.8.30	2004.7.24	2005.7.30	2006.7.29
コイ	ウグイ	アベハゼ	アユ	コイ	アベハゼ	ウキゴリ
ボラ	ドジョウ	アユ	オイカワ	ヌマチチブ	ウナギ	コイ
		オイカワ	コイ	ハゼ	コイ	スミウキゴリ
		カマツカ	ヌマチチブ	ハヤ	スミウキゴリ	タモロコ
		チチブ	ビリンゴ	ボラ	ヌマチチブ	ナマズ
		ドジョウ	ボラ	メダカ	ビリンゴ	ヒメダカ
		ビリンゴ	マハゼ		ボラ	ボラ
		フナ	マルタウグイ		メダカ	マハゼ
		マハゼ	モツゴ		モツゴ	モツゴ
		マルタウグイ			ヨシノボリ	

その他

サホコカゲロウ	サホコカゲロウ	ヨコエビ	アメリカザリガニ	ヤゴ・イトトンボ	モクズガニ	アメリカザリガニ
シマイシビル	シマイシビル	サホコカゲロウ	モクズガニ	コカゲロウ	サホコカゲロウ	モクズガニ
	ミズムシ	イトミミズ	ガガンボ	ユスリカ	ユスリカ	
	ユスリカ	シマイシビル	コカゲロウ	シマイシビル	ヒル	
		ミズムシ	ヒル	ミズムシ		
			ミズムシ			
			ユスリカ			

魚

2007.7.28	2008.7.27	2009.7.26	2010.7.25	2011.7.24	2012.7.29
アユ	アユ	アユ	ウキゴリ	アユ	アユ
ウキゴリ	ウキゴリ	ウキゴリ	ウグイ	オイカワ	コイ
コイ	オイカワ	コイ	オイカワ	コイ	スミウキゴリ
スミウキゴリ	コイ	ドジョウ	コイ	セイゴ	ヌマチチブ
タモロコ	ドジョウ	スミウキゴリ	スミウキゴリ	ナマズ	ビリンゴ
ナマズ	ナマズ	ナマズ	ナマズ	ヌマチチブ	
ヌマチチブ	ヌマチチブ	ヌマチチブ	ヌマチチブ	ビリンゴ	
ビリンゴ	ビリンゴ	マハゼ	ビリンゴ	マハゼ	
マハゼ	マハゼ	メダカ	マハゼ	マルタウグイ	
	メダカ			メダカ	

その他

モクズガニ		クサガメ	ヒキガエル	アマガエル	ミシシッピアカミミガメ
		ミシシッピアカミミガメ	アメリカザリガニ	アメリカザリガニ	アメリカザリガニ
		アメリカザリガニ		モクズガニ	モクズガニ
		モクズガニ		アメンボ	
		ヤゴ、ギンヤンマ		ヤゴ・イトトンボ	
		ヤゴ、オニヤンマ		ヤゴ・シオカラ	
		ヤゴ、アオモンイトトンボ			
		ガガンボ			

冬の鳥調査記録 (1996～2012)

	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	計
アイガモ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	1	1	0	0	4
アオサギ	0	0	0	0	0	0	0	1	3	0	1	1	0	4	2	0	0	12
アオジ	3	0	2	1	3	4	7	2	10	4	2	7	4	6	5	6	4	70
イソシギ	0	0	0	0	2	2	2	0	1	3	0	2	2	2	3	2	2	23
ウグイス	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	2
オオバン	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	9	5	11	13	8	47
オオジュリン	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
オオタカ	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
オナガ	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2
オナガガモ	12	12	14	3	4	9	9	4	8	2	0	2	8	7	4	19	5	122
カイツブリ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	1	0	3
カルガモ	9	19	9	4	5	9	7	0	13	17	14	6	6	16	20	11	4	169
カワウ	1	0	0	11	2	1	3	1	4	4	0	2	2	1	3	0	1	36
カワセミ	0	0	0	0	0	1	1	0	0	1	0	1	1	0	0	5	1	11
カワラヒワ	61	0	0	9	0	36	70	34	7	0	4	0	7	18	0	0	4	250
キジバト	16	12	4	11	4	1	5	7	9	2	1	0	0	5	2	1	16	96
キセキレイ	1	4	4	3	6	3	3	4	4	4	0	3	13	0	1	0	0	53
キンクロハジロ	0	0	1	0	0	4	2	1	3	3	0	2	1	6	0	5	0	28
ゴイサギ	2	0	1	4	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	10
コガモ	19	35	13	4	22	10	12	9	29	24	19	43	26	15	10	2	18	310
コゲラ	0	0	1	3	2	1	0	0	1	0	0	0	1	2	0	0	0	11
コサギ	0	0	1	2	0	0	1	0	1	0	0	0	0	4	0	1	1	11
シジュウカラ	3	8	7	3	4	4	6	0	5	6	8	4	6	7	4	4	3	82
ジョウビタキ	2	1	2	3	0	1	5	0	3	1	0	0	6	3	1	2	5	35
シロハラ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
スズメ	156	150	131	145	143	101	173	82	140	98	17	147	101	114	139	137	80	2054
セグロカモメ	0	0	0	1	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	1	4
セグロセキレイ	8	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	1	0	0	0	11
セッカ	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
ダイサギ	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	2
タヒバリ	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
ツグミ	16	1	9	2	0	4	2	1	0	0	2	7	0	1	0	0	14	59
ドバト	20	12	31	105	133	7	67	69	58	119	25	64	42	139	78	80	112	1161
トビ	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	2
ノスリ	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
ノビタキ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
ハクセキレイ	17	15	16	21	13	8	5	20	40	32	2	25	18	13	10	13	13	281
ハシボソガラス	3	8	10	4	11	18	14	18	4	24	11	44	28	74	12	9	23	315
ハシボソガラス	2	15	16	10	1	6	2	0	4	3	0	2	0	0	0	2	2	65
バリケン	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1	1	1	1	0	6
ヒドリガモ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	2
ヒヨドリ	10	12	11	30	11	7	47	18	23	4	18	70	65	29	42	34	25	456
ホオジロ	12	1	2	0	2	2	4	0	1	3	0	1	4	0	0	0	0	32
ホシハジロ	0	0	0	0	0	0	3	0	0	4	0	0	0	0	0	0	0	7
マガモ	5	1	1	2	7	6	4	1	3	4	0	5	3	3	3	2	0	50
ムクドリ	45	18	12	3	1	4	3	18	5	2	7	28	4	19	0	0	39	208
メジロ	8	0	8	7	3	5	7	2	0	8	0	11	20	1	2	19	101	
モズ	0	0	0	0	0	1	5	2	0	0	0	0	0	2	0	4	3	17
ユリカモメ	56	61	33	14	63	116	70	13	78	141	16	40	2	29	56	20	1	809
計	489	385	340	407	445	372	539	310	460	509	156	508	374	552	409	378	406	7039

[冬の野鳥観察会以外で観察された野鳥]

(これら大半は、飯田文男さん提供、「アリスイ」は、田村良成さん:2013.2.14.15日に確認、提供)

アカハラ、アリスイ、イソヒヨドリ、イワツバメ、ウミネコ、オオヨシキリ、オカヨシガモ、カシラダカ、カンムリカイツブリ、キアシシギ、クイナ、コチドリ、コアジサシ、コチドリ、コヨシキリ、ササゴイ、シメ、シロチドリ、タシギ、タヒバリ、チョウゲンボウ、ツバメ、ツリスガラ、ハシビロガモ、バン、ヘキチョウ、ベニマシコ、マヒワ、ワカケホンセイインコ

川辺にひろがる外来種

矢上川で毎年実施している春の野草観察会で見えるタンポポ、ナノハナ、オオイヌノフグリなど、とてもきれいです。秋には、セイタカアワダチソウ、オオバタクサ、セイバンモロコシなど、わがもの顔で河川敷に陣取っています。実は、大半が外来種なのです。鳥では、ドバト。その他、河畔で甲羅干しをしているミシシippアカミミガメなどもそうです。

外来種とは 原産地から意図的または偶然に運ばれて、新たな場所に定着した生物種のことです。外来種は2000種を超えるといわれ、そのうち4分の3は植物だそうです。

(意図的: 観賞用、食用、園芸、医薬用、レジャー用 など。偶然: 輸入品の荷物の中外、船や飛行機、人の靴、着物などに植物の種子や昆虫などがまぎれてきたものなど。)

どの時代に?

縄文時代、平安時代、・・・江戸時代にも、明治、大正、昭和、平成にも沢山入っています。古い時代のものは、帰化生物などと呼ばれることもあります。

矢上川で観察できた主な外来種の野草、鳥、魚など

野草 アカミタンポポ、アレチウリ、オオアラセイトウ、オオイヌノフグリ、オオバタクサ、ククイモ、シロツメクサ、セイタカアワダチソウ、セイヨウタンポポ、セリバヒエンソウ、ハルジオン、ヒメオドリコソウ、ヒメジョオン、ヨウシュヤマゴボウ、ワルナスビなどがあります。

鳥 カワラバト(ドバト)、ワカケホンセイインコなどがそうです。

魚など 魚はカダヤシ、ブラックバス、ブルーギル、グッピーです。その他では、ミシシippアカミミガメ(こどものとき、ミドリガメ)、ウシガエル、アメリカザリガニです。

外来種の功罪

薬、食料、家畜の餌や観賞用に持ち込まれて、役に立つものも沢山ありますが、強い繁殖力で在来種の生態系に影響を及ぼすものや、強い毒性などで人体に危険なものもあります。

【侵略的外来種ワースト100】

人為的に持ち込まれ、生態系や経済に重大な影響を与え、環境問題のひとつとして扱われるもので、日本生態学会が定めたものです。矢上川では次のものが確認されています。

野草では、アレチウリ、オオバタクサ、セイヨウタンポポ、セイタカアワダチソウ、ハルジオン、ヒメジョオンなど。野鳥では、ドバト。魚などでは、ブラックバス、ブルーギル、カダヤシ、ミシシippアカミミガメ、ウシガエル、アメリカザリガニです。



【余聞】

- ・シロツメクサ(クローバー) オランダからガラス食器などを輸入したとき、壊れないよう詰め物として使用したことから、この名がついたといわれています。
- ・セイタカアワダチソウ 一時期花粉症の原因とされましたが、関係ないことが判明。この野草にだけ寄生するアブラムシも一緒についてきました。セイタカアワダチソウヒゲナガアブラムシで、全身赤色、2.5ミリで一般よりやや大きい、観察してみてください。

矢上川の歴史 ～矢上川は見てきた～

1.氷河期終期（1億 2000万年前）

氷河期の終わりにかけて気温が上がるにつれて氷が溶けて川ができました。矢上川の誕生です。矢上川は現在の矢上川の流路沿いに南東方に流れ、加瀬山の北を南東へ抜け、鹿島田駅付近で古鶴見川と合流していたようです。



この時代の終わり頃には人が暮らし始めましたが、石を加工した道具を使っていたいわゆる石器時代です。狩りをしたり草木の実を採ったりして矢上川の流域でも暮らしていました。

2.縄文時代（1億 2000年前～ 2400万年前）

地球温暖化が進み、この時代の中期（約 6000年前）には海面が現在より 4m程高く、海岸線が溝ノ口付近まで入り込んでいました。（縄文海進と言われています。）その頃の加瀬山は海に囲まれた島でした。この島で暮らす人がいたことはここに貝塚があったことから分かります。矢上川はほとんどの部分が海の底になっていました。

縄文海進の時期から地球は寒冷期となり、この時代の後期には陸地が広がって今の川崎駅あたりが海岸線となりました。矢上川は海底から姿を表わすわけですが、現在のように渋川の合流点から南下して鶴見川と合流するようになりました。

縄文時代後期になると気候が温暖化しはじめたので、草木が茂り動物も増え、また魚や貝も入手しやすくなりました。人々は生活しやすい竪穴式の住居に定住するようになり煮炊きするための土器が作られ、その模様に縄目が着いている物が多かったので縄文時代と名づけられました。矢上川流域での縄文人の集落跡としては神庭遺跡（中原区井田、中原養護学校の敷地内）が発見されております。

3.弥生時代（2400年前～ 3世紀）

矢上川の形は変わっていませんが、海岸線は更に遠くになりました。

この時代の特徴は稲作が始まったことで、矢上川の水を利用して稲を栽培したようです。生活が楽になって神庭遺跡に住む人も増え、またその近くにも集落ができました。

4.古墳時代（4世紀～ 7世紀）

水田を作り稲作を進めるためにその地に住む人々は協力しあい、その結果豊かな生活ができるようになりました。しかしその反面、耕地や水利の確保などを巡り争いが始まり、蓄えた食料を奪い取る争いも生じました。そこでいくつかの集落が集まり共同体ができて、ムラと支配者（首長・豪族）の誕生です。豪族対豪族の争いがまた起こり、有力な豪族は大和政権ともつながりを持つようになりました。

支配者の墓は古墳と言われ、矢上川の流域にいくつか残っています。墓ではあるが首長の勢力を誇示するために大きく立派に作られました。

主な古墳を紹介します。(位置：(1)～(4)は15頁参照、(3)～(4)は4～5頁参照)

(1) 白山古墳

4世紀後半の築造で前方後円墳です。全長 87m、高さ 10mで南関東では最大クラス。副葬品の三角縁神獣鏡は被葬者が大和朝廷と深くつながっていた豪族の証拠でしょう。

(2) 第六天古墳

6世紀前期、白山古墳に隣接して築造された第六天古墳は、横穴式石室墳です。豪族同士の争いで戦死した人の墓と言われています。

(3) 観音松古墳

4世紀後期の築造。全長 80～92m。白山古墳に続く次世代の前方後円墳です。

(4) 矢上古墳

5世紀中期の築造で、竹籬・勾玉などの副葬品からみて、高貴な若い女性の墓ではとされています。

(5) 馬絹古墳

古墳時代終わり頃の築造で、直径約 30m、高さ約 4.5mの円墳です。きわめて大形で立派な横穴式石室があり、非常に勢力のある豪族の墓と思われる。

(6) 西福寺古墳

6世紀後半の築造で、埴輪が樹立している市域の円墳としてきわめて著名な存在です。

5. 飛鳥時代・奈良時代(600～794)

古墳時代の豪族は、逐次大和朝廷に服従し、7世紀には大和朝廷を中心とする国家の形が出来上がりました。矢上川流域を含む一帯は武蔵国橘樹郡に区分され、影向寺付近に橘樹郡衙(郡の役所)が設置されました。法律(律令制)が制定され、税として納める米などを集め、それを大和の朝廷に送るための倉庫が近くにあったようです。矢上川に面して「明津」という地名が今もあります。津は船着き場と考えられます。税として集めた米などの輸送に鶴見川から海につながる矢上川を活用したと推定されます。

6. 平安時代(794～1192)

律令制度にもとづき、水田は国有化されましたが、新しく切り開いた土地は私有地になるので、大規模な開発が進みました。そしてこれらの土地は貴族や豪族の持つ荘園へと姿を変えていきました。

加瀬山の西端、白山古墳のすぐ南から、川崎市から出た唯一の国宝である秋草文壺が出土しました。平安時代後期(12世紀)頃に火葬骨を納めるのに用いられたものですが、日本陶芸史上類を見ない程のすぐれた壺です。

当時この地は皇室領の荘園だったので、常滑、渥美あたりからの皇室献上品を皇室から当地の領主に与えられたものと云われています。現在は国立博物館にあります。



秋草文壺

7. 鎌倉時代(1192～ 1333)

(1) 加瀬の地名

鎌倉時代の初期に山城国相楽郡加瀬郷(京都府) にいた加瀬将監資親が北条時房に従って当時の地名での大倉村に来て、この地を支配し、地名を加瀬と変えたとのことです。荘園の持主が貴族や豪族であった平安時代が終わり、土地の支配者が武士に代わったという時代の大きな変化を示す出来事です。

(2) 鎌倉街道

鎌倉を中心とした幕府は政治・軍事の必要から、鎌倉街道を鎌倉中心に放射状に作りしました。その一つは平間の渡しから北加瀬の札幌を経て、観音寺前を通り、矢上橋を渡り、日吉台地の南縁をたどって綱島方面に抜ける街道でした。(15頁地図参照)

8. 室町時代・安土桃山時代(1333～ 1603)

(1) 太田道灌

頼朝が開いた鎌倉幕府を乗っ取った北条氏が滅びてから、足利の時代(室町時代) になります。その終わりにかけて太田道灌が加瀬山に来て夢を見た話が有名ですが、小机城を攻めるためにその軍勢が加瀬山付近に来て鎌倉街道を通り、矢上川を渡った事でしょう。

(2) 中田加賀守と矢上城

足利に代わって関東一円を手に入れた北条早雲は小田原を拠点に関東を支配しました。早雲より五代、いわゆる後北条氏の始まりです。

中田加賀守はこの後北条氏の家臣で、矢上村の現在保福寺がある谷戸に館を構えました。そして慶応大学日吉キャンパスの東側台地に矢上城を作りました。加賀守は秀吉軍による北条攻めの時には当地で防戦に当たりましたが、天正 18年(1590) 小田原落城の直前に亡くなりました。キャンパスの野球場西側に子孫が作った墓があります。矢上橋より少し上流左岸にある観音寺境内には萬靈供養碑があり、当時の戦没者を吊っています。



三界萬靈碑の由来
天正十八年、秀吉による小田原攻めのおり、矢上城より出兵し戦死した者を弔う為、昭和七年、矢上村 岩上照雄氏が、現在の横浜市港北区日吉三丁二一十七の地にこの碑を建立した。その後、昭和五十一年、矢上川改修工事の為、吉本正一氏によりこの境内地に移転されました。

三界萬靈とは、欲界・色界・無色界の三つの世界から成る、生き物が輪廻転生する世界に留まる全ての靈の事である。

9. 江戸時代(1603～ 1867)

(1) 板橋供養塔

板製矢上橋の架け換えの時には、その費用として矢上村はもちろん近郷や隣村から寄附を受けて建設されました。また、矢上橋のたもとには「奪衣婆」(だつえば: 亡者) がいて「夜ここを通る人の着物をはぎ取る」という言い伝えが昔からありました。

亡者の供養と橋の安泰を願い、併せて寄付者の名を刻み、板橋供養塔が矢上橋のたもとに建立された次第です。寄付者の名から天保年間(1830)



の頃に作られたものと云われています。近年の大規模な河川改修の時に岩屋観音のある日吉 5丁目、宮前公会堂の付近に移設されました。

(2) 鷹狩りと鷹野大橋

代々の徳川将軍は鷹狩り(訓練した鷹に野鳥を捕らせる)を好み、江戸周辺の農村地帯を鷹狩りの場所に指定しました。矢上川流域の大半もそれに含まれ、鷹の獲物となる野鳥保護のために、狩猟禁止は当然のことながら、冬場は鳥の餌となる魚捕りの禁止や耕作の制限がなされていました。鷹野大橋の名前はこの事に由来します。

10.近代(1867～)

(1) 日吉村の分割

明治 22年(1889) に矢上川下流域の南加瀬・小倉・鹿島田・矢上・駒ヶ橋・駒林・箕輪の 7村が合わされて日吉村が誕生しました。大正 14年(1925) には住吉村から北加瀬村が編入されて 8村の集まりとなりました。

昭和になって川崎・横浜両市から合併の申し入れがあり、村中でどちらに入るか大騒ぎになりましたが、昭和 12年(1932) に矢上川を境として川崎と横浜に分割されました。



(2) 袋河岸

一本橋の右岸川下側に現在「鏡ヶ淵公園」があります。この辺の字名は日吉村全図にありますように袋と言われていました。矢上川が曲がりくねって袋のようになっていたのでこの名前がついたのでしょう。ここが船着き場になっていましたので袋河岸と命名され、小型の舟が都市から運んだ下肥(しもごえ)を降ろしたり、地元でとれた野菜を積み込んでいました。

(3) 樋橋

現在のシャルマン団地付近にあった水田に小倉用水からの水を供給するため、これより水位の低い小川をまたぐための木製の樋(とい)を作り、水路の立体交差をしました。「樋橋」と呼ばれていましたが、バス停の名前「樋橋」がその名残りです。

(4) 県水堀

南加瀬・小倉一帯の水田には矢上川の水でなくニヶ領用水の水が使用されていましたが、戦時の食糧増産のためニヶ領用水の水を他地域に振り向け、この地域には矢上川の水を配ることになりました。

そこで、昭和17年(1942)矢上橋から50mほどの下流から夢見ヶ崎動物公園前のバス停付近にかけて県の重点工事として用水路が建設され、これを地元では県水堀と呼びました。

戦後、宅地化が進みこの用水の必要がなくなったので、昭和 29年(1954) になり埋め立てられて道路になりました。

矢上用水のこと

細谷 保治



鷹野大橋から北西の方を見ると、家並みの先に日吉の台地の斜面緑地が不完全ながら見えます。かつて、この台地のすぐ前を流れていて、鶴見川までの一面の沖積地の稲作を成り立たせていたのが、矢上用水です。

台地の下と矢上用水の間には農家が連なっていました。私は、用水のやや上流にある農家に生まれました。物どころがつかないころには戦争で焼け出されていて、バラック住まいでしたが、子どもには何の不自由もない遊びの世界がありました。

矢上用水はいつごろ作られたものかは知りません。渋川合流点より少し上で取水して、南西に向かい宮前の耕地を灌漑し、その先の箕輪の一部と綱島の一部にも及んでいました。

私の見た用水は何百年かの用水の年月の最後の中の上層のごくわずかなものです。用水はふつう先へ行くほど水量が減ります。幅は平均2m位、水深はうちの付近では通水時(4月～9月)は50cm程、落水時(10月～3月)は20cm～30cm位でした。

矢上川は大正年間、洪水対策で大改修を受けて掘割化され、田園の自然の姿を失います。流路はなるべく直線化して、川底を3m位掘り下げその土で土手を築きました。それ以来、矢上用水の取り口は毎年しっかりとした堰を作り水位を上げて取水するようになりました。といっても土嚢と木材の堰ですが。

まもなく日吉や上流の溝の口方面で都市化が始まります。下水道を伴わなかったのが矢上用水にも下水が流れ込むようになりました。農村でも川に下水を流しましたが、戸数が少ないこと、どこでもと限らないのですが下水の水はマンホールである大きなかめを通して沈殿させ、うわ水だけが土の溝を何十mか流れて川に行きました。で、途中で土にしみこんでしまい川まで達しないことも多かった。かめはたまには掃除を

して、沈殿物をせつなぎといい、畑の肥料になりました。

1950年前後の用水の水質は昔とは違っていたはず、でも農村の子の私たちは昔と同じように川に入って遊びました。(用水を川と言っていたので以後川といいます)

夏は水泳、ふるちんになってバタ足で上流に上って行きます。息をする時はちょっと川底に手をつけて頭を上げる。(そう、泳げなかった)

帰りは流れのまにまに流されて、やはり時々手をつけてラクチンラクチンです。

■魚のこと



いわゆる富栄養化になっていて、生き物の量は清い川より多いようでした。その量の半分位は移住したてのアメリカザリガニ(以下ザリガニ)が占めていたようです。(水辺のカエルは別) それでも南関東の小川で一般にみられる魚はいました。ハゼの類、ドジョウ、クチボソ、メダカ、フナ、数種のタナゴ、などがふつうで、コイ、ヤマベ、ハヤ、ナマズ、ウナギ、なども少しはいました。アユがいませんがアユを見たり聞いたりした覚えは

ない。初めてアユを見たのは小 5の時に学校のキャンプで津久井の学校に泊まりに行き、いけすに多数いるのを見ました。

こんな魅力的な魚が矢上川にもいた、いる、なんて想像できませんでした。コイ、ハヤ、ナマズ、は幼魚ぐらい。

一つの理由は毎年の通水の前の用水の手入れ、「堀さらい」にあると思います。田に引く堀の水をできるだけ抜いて、用水組合の人々(地域の農家のおじさん)がスコップで軽く浚って行きました。泥と一緒に水も道や畔に放り出す。巻き添えで多くの魚が死んでしまいます。水が汚れたとき魚を収容しなければならないのです。というのは偽善的な言い方で、実際はおもしろいように魚が捕れました。学校が終わり慶応の丘を夢中で下ると、すでに「堀さらい」が通った後のことも度々ありました。

川の南側は車も通れる道です。のり面にはメヒシバ、カラムシ、ミソソバ、アレチノギク、センダングサ、ジュズダマ、スカンボ、オシロイバナ、などが生え、ユウガオ、アオイ、ケイトウ、も毎年ありましたが草刈のときに残されていたらしい。北側は農家の屋敷畑で川端にはさまざまな木が生えていました。うちの前だけでも、サンゴジュ、グミノキ、ツバキ、サザンカ、クワノキ、サンシユユ、レンギョウ、イヌマキ、モチノキ、サク

ラなどがありました。草はスゲの類が刈られずに水面に垂れていました。

祖父が立派な三角網を作ってくれて、兄と二人でそれで魚とりをしました。勘を働かせて魚のいそうな所の近くにそっと網を沈めます。少し離れた所から兄が足で水をかまがまかきまぜて魚を追い出します。たいていはザリガニとドジョウ位、クチボソが入っていればいい方でした。でも毎日のように何十回もやっていると、たまにはタナゴやヤマベ、フナが入ることもありました。ザリガニはむろん、ドジョウやハゼの類も逃がして、フナやタナゴを家に持ち帰り 1m²ほどの池に放すのが目的でもありました。

その当時私も兄も池の魚に餌をやるのを知らなかった。池にジモグリというヘビがよく来ていたせいか、池が魚で混みすぎることはなかった。

三角網を使うのは堀の方が適していました。堀の幅は 1m ならず、三角網は間口 70cm 位で堀をほぼふさぐことができた。網を置いた所から 10m ほど上流で堀に入り、足で水をかきまぜながら網まで行きます。するとその所に棲んでいる生きもののほとんどが網に入ります。

まずはザリガニのひとかたまりを放り出す。次に水棲昆虫、ゲンゴロウはすばやく逃げてゆけれど、タガメ、ミズカマキリ、

ヤゴその他何だかわからない虫もいたりして気持ち悪いけれど地面にあける。魚も一緒に出てフナやタナゴがいればバケツに入れます。ドジョウは這って堀に戻るけれど、メダカなどはそこで死んでしまいます。

エゴノキの実で毒揉みをしたこともあります。宮沢賢治の童話ではサンショウを使うのだけれど、われわれは身近にあるサンショウを使うことを知らなかった。エゴノキは毒モンモと呼ばれていました。少しも桃に似ていませんが、着果したての桃の幼果がエゴノキの実に似ていると言うことで名がついたらしい。そのエゴノキはまだ裏山にありますが、枝が伸びすぎて先年の弱い台風で幹が裂けて倒れみる影もありません。まずエゴノキの実を 1リットル位は採って木づちでたたいてつぶしてざるに入れる。そして川の中でざるを揺さぶり毒を水中に流す。夏の豊かな水量では効果はあまりない。ドジョウがしきりに浮き出てうす黄色い腹を見せて沈んでゆく。

ドジョウはふだんでも少しはこういうことをします。魚も数匹浮き上がり横になって泳いだりしている。それをたも網ですくってバケツの水の中に入れるとすぐに落ち着いて正常に戻ったようにみえます。毒はたちまち拡散して川の表面に何の変化もない状態になります。期待と労力の割にはあっけないことでしたが、大人もやるという毒もみをしたことで満足しました。

■釣りの話



ザリガニつりも釣りのうち。幼児のころからしていたはず。餌は誰かに付けてもらっていたのだから記憶にありません。それはこういうこと。カエルを手で捕まえて地面にたたきつけて殺す。後ろ足から皮をむいて前足の所で止めます。カエルの頭が皮で隠れるのが最もザリガニが好むのです。

どういうわけか、魚とりの時はザリガニを逃がしますが、釣った時はうちに持ち帰りました。そして時々うちじゅうでゆでて食べました。家によって食べなかったり、飽きるほど食べていたようです。タンパク質が不足している時代でしたが、食文化ではザリガニは下の食べ物、または非常食といったところ。本場のアメリカ南部の田舎ではふつうに食べられているらしい。

昔見たフランス映画の中で、主人が庭先の小川へ行って片腕を川底まで差し入れるシーンがありました。そして少し時間をおいて顔をしかめる。やおら片手を水から出すとザリガニがその手にたくさん食いついて上がってくる。

次のシーンは夕食で皿にザリガニが山盛り

になっていた。田舎暮らしの簡便な豊さの表現でしたが、ザリガニの食餌の戯画でもありました。

ちょっと違うのは、一つの餌に複数のザリガニがいる場合、たがいにけんせいすることがみられることです。喧嘩はしませんが大きな方に奪われることもある。ただ食事に夢中になってくると他のことは気にならなくなる、釣り上げる時だ。

ザリガニがこんなに多いのは大きな魚がないので捕食者もあまりいないせいだと思います。ザリガニは尾の下にこどもをびっしり抱えて子育てをします(100匹位か)。こどもが大きくなってくると尾の下に収まりきれずこぼれるのがありますが、やがて一斉に親離れます。体長は1cmほどでしたか。親離れた子は数日間、親のそばにいて捕食者が来ると親の下に隠れるそうです。アメリカの生物社会でもまれてきただけのことはある。

うちではにわとりを平均10羽位飼っていました。うちで玉子を食べるのではなく、とって置いて半月に一度取りに来る玉子屋のおばさんに売りました。にわたりの餌はくず米とくず野菜を混ぜたもので、人間同様栄養が偏っていた。それで釣ってきたバケツのザリガニをとりごやの中にあけたのです。にわたりがすぐに寄ってくる。ザリガニも異界の怪物を察して、つめをめいめい最大限に振り開いて防御のため後ずさりを始める。私など

はつめを避けて背後からつかみます。わざと指に挟ませたら直ぐに血がでてきてちょんぎられるかと思った。が、にわとりは正面攻撃、頭の甲に素早くちばしをつきたてて首を振る。ザリガニは投げ飛ばされる。再び防御の姿勢をとろうとすると二度目の攻撃を受け重傷を負ってしまう。後は食われるばかりだ。水中では後ろに飛び退く特技がありますが、地上ではいかんせん動きが鈍い。ザリガニの数が多いと爪を振り上げず、すたこら歩いて鶏舎の外に逃げ出すのもいました。にわとりを喜ばすこととザリガニの無残、これはなんなんだろうと思っていました。

昔の子どもは採集生活を遊びとして体現します。川からシジミを取ってきてうちで食べました。どこにでもいるのではなく、砂地で川中に清水が湧き出ている所にいました。1950年代前半に絶滅しました。カラスガイもわずかにいましたが食べ物と思わずそのままにしていました。テナガエビとモクズガニは昔はよく食べたと言います。しかしザリガニのせいでしょうか。ごくわずかしきかず食べる気にならず放しました。

川に少しいて田に多くいたのはタニシで、うちでは食べないので取ってはこなかった。

ウナギは二度ほど見かけただけ、ドジョウは春になると堀から苗代に多数移ってく

る。夜になると灯油ランプをつけて針のたくさんついた道具（売っていた）でドジョウ突き、こどもたちが苗代をめぐって歩くのが春の風物で、私もその中にいたのだが、ドジョウを食べた覚えはありません。

さて、川での魚釣りといったら、まずクチボソしか釣れません。重りが深いとダボハゼやザリガニが針まで飲み込んでしまい、外すのがやっかいです。そんなことでじきに飽きてしまいます。と、岸辺のカエルが目に入る。よく太っているではないか。針にケイトウの花なんか着けてカエルの顔の前で動かします。するとカエルがパクリ。すかさず竿を上げる、なんという重量感。でも付いているのがカエルではと、その日の釣りはおしまい。

■用水の最後



私は10歳位になると少し離れたグループへ行って毎日いろいろな遊びをするようになりました。それで家の近くでの川遊びをあまりしなくなりました。その仲間も釣りをしたので宮前のあちこちで釣りをしたけれど矢上川だけはしたことがない。そのころ渋川へ毒を流す工場ができて矢上川は一時死の

川になった。(と、私たちは思っている)。釣りの餌は堆肥にいくらでもいるミミズでいいのですが、時には綱島駅前の釣り道具屋へ赤虫(ユスリカの幼虫)を買いに行きました。

中学に行くころには、農家ゆえ労働力を期待されて遊びから遠ざかります。自分から遊ばなくなったともいえます。それから5年もたつと川底はアカムシだらけ。アカムシを売るためによそから人が取りに来ていました。

アカムシ時代は5年余り、後はイトミミズがかたまりになって増えてきて、まったくのどぶ川になりました。これは単に人口が増えて下水を川に流したということだけでなく、水洗便所にしたいけれど、下水道がなく、個々の家で簡易浄化槽を設けて、浄化できていないものを川に流したことによります。堀さらいもしなくなり汚泥が積もるばかり。道端のメヒシバが張り出して盛り上がり川面をふさいでいる所もありました。うちの前ではセリが強く、川面一面鮮やかな緑で盛り上がり植物の栄光を感じたくらいです。下水道ができたのと川と堀が埋め立てられたのはほぼ同時に1980年ごろです。それまで地元の者はどう思っていたかという、都市化の過程はこんなものかと思うだけ、それが我々の精神というほかはない。

こどものころの生き物との出会い。相手には不幸なことばかり書きました。

無数の命によって人の生があることはだれにとっても変わらないことですが。 了

■ 蛇籠(じゃかご)のこと



大潮の干潮のとき一本橋から上流を見ると、玉石の中を水流が下るのを見ます。この玉石は、1950年代にここに蛇籠が用いられていたときの物だと思います。

蛇籠というのは、本来竹を割って経30センチぐらいで長さは堤防の高さほどで、ごく目の粗い筒状のものに玉石を詰めたもので、縦にすきまなく並べて土の堤防が増水の時崩れないようにしたものです。このころは狭い矢上川の時で、急傾斜な堤防はやぶで、川岸は今の矢板ほどではないにしても1m位は植物のない満潮線で、垂直に近く水の中に入っていました。

それで小学生ばかりの子ども集団の私たちは水際にも近づけなかったのです。

でも蛇籠が作られると、(鉄線でつくられていましたが)早速蛇籠を伝って水中に降りていきました。川底に達して少し上流に歩きました。引き潮だったので、股までは深くはなかったけれど流は早く冷たくて、少し危険を感じたことを覚えてます。

なぜだかわからないことですが、蛇籠で遊んだのはこの1回きりです。まもなく蛇籠はクズの繁茂で埋もれて、夏の宵にここに来たらクツワムシが大繁殖していて、うるさいのに驚きました。

川の思い出 ～鶴見川で思い出すこと～



—私が子どもだった昭和10年代の頃—

辻町内会 新堀 安一

鶴見川は、今でこそ川幅が100メートルくらいはありそうな大きな川ですが、私が子どもの頃の昭和10年代は、辻のあたりで30メートルあるかないか、川底も浅い急流でした。ですから思い出すことはどうしても川のせまさと浅さにつながってきます。

その1 ～石ゲンカのこと～



まず思い出すのは石ゲンカです。集団で石を投げる相手は、対岸の駒岡の子ども達でした。

石ゲンカの歴史は非常に古く、その原因は兩岸の堤防がなかった時代にさかのぼるといふ話です。

洪水で溢れた鶴見川の水が辻か駒岡か、どちらに大量に流れたかをめぐって、兩岸の住民はにらみ合ってきました。自領に多く流れれば、対岸の治水が悪い、自分たちの死活にかかわる大問題だというわけです。鶴見川は暴れ川でしたから洪水はしょっちゅうでした。

にらみ合いは堤防が出来る大正6(1917)年まで、延々とつづいてきて、それが子ども達の世界にも及んでいたのです。

私の叔父は明治末に少年時代を過ごした人です。「オレたちもよく石ゲンカをした。ある

日、親の言いつけで駒岡に行かされたんだけど、どんな目に会うか分かんないし、あの時はホントにおっかなかった」と話していたのを憶えています。

私が子どもの頃の石ゲンカは、たとえばこんな風でした。

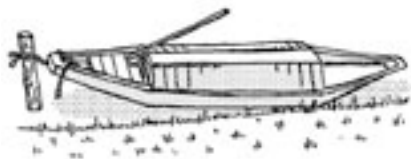
辻の子ども達はよく、川岸の沼地にいるシジミをみんなで取ったものでした。貧しい家が多かったので、食事のおかずにするためです。それを見て、駒岡の子ども達が大声でからかう。すると辻の子ども達も黙ってはいない。すぐさま石集めにかかります。駒岡の子ども達も同じです。

昔はどこもかしこも砂利道でしたから、石ころは無数にありました。けれども、お互い思いっきり投げるし、川幅がせまいから、けっこう相手に届く。それをよけながらの投げ合いなので、かなり危険でした。先日、昔のケンカ仲間だった男が、こんなことを言っていました。

「こっちの石があっちのヤツの頭かどこかに当たったんで、こっちの親があわてて謝りに行ったことがあったんだ」。

鷹野大橋ができたのはずっとあとで、駒岡へ行くにはいまの鷹野人道橋の少し上流にあった鷹野橋か、ずっと下流の末吉橋(どっちも木造でした)を渡るしかありません。私は、謝りに行った親はきっと鷹野橋を渡ったんだと思います。なぜなら、子ども心に鷹野橋はすぐ近くで、末吉橋はずいぶん遠くだなあ、と感じていましたから。

その2 ～こやし舟のこと～



辻はほとんどが農家でした。大工、左官を家業とする人がいたので「職人の村」として江戸に聞こえていましたが、彼らも農業を兼ねていました。

農業に欠かせないのは肥料です。当時の肥料はほとんどが人糞でした。しばらくはくさい話ですが、ご容赦を。

人糞は、専門の船頭が川下の鶴見、菅沢あたりで集め、舟にたっぷり入れて、舟着場へ運んできます。舟着場は今の鷹野大橋の下あたりにありました、船頭は、川下の家々から糞の始末料を受け取って稼ぎ、川上の農家に売って稼ぐ。クソもうけとはこのことです。

わが家も小規模ながら田畑を持っていたので、リヤカーに肥たごを乗せ、舟着場から肥溜（こえだめ）へ人糞を運ばなくてはなりません。ところが難所が一か所ありました。舟と舟着場をつなぐのが、幅わずか50センチほどのせまい板だったのです。

専業農家のおじさんは、満杯の肥たごを天秤棒で前後にかつぎ、拍子をとりながらいとも軽々と渡ります。それを見て私も、16才くらいにはなっていたので、なんとなくやれそうだと挑戦したのですが・・・。

右肩にずしりと重みがきました。そこでやめておけばよかったのに、こらえてかつぎ上げ、ふらつきながら板にさしかかりました。

ここで大事なのは、板のしなりと肥たごをかついだ自分の重さとのバランスをとることです。板が下にしなれば自分も沈む。しなりが戻れば自分も浮く。ところが板の半ばで、それが逆になったからたまらない。肥たごが川の中へドボン。

「おめえには、ちっと早えんだよな」おじさんたちが、笑いながら拾い上げてくれました。

その3 ～桃ドロボーのこと～

駒岡の川岸には桃畑があり、思い出の中の桃畑は美しく熟した桃で溢れていました。夏のはじめ、辻の悪童たちは、それを目かけて鶴見川に飛び込みました。

辻という村は、土手と川の間に田んぼと畑と沼地が広がり、今のポンプ場のあたりには小さな林があって、甲虫（かぶとむし）がいました。けれどもそれだけで、桃畑は水害で消えていました。だから、今は盗んでも桃を食いたいのです。

上げ潮から引き潮が変わるとき、流れが穏やかになります。そこを狙って泳ぎ渡り、すばやく桃を盗むと、すかさずとって返す。現地で呑気に食っているひまなどありません。私も仲間も、駒岡のこわいおじさんに捕まったことはなかったけれど、しかし、かんじんの桃の味がどうしても思い出せません。

味といえば、畑のトマトを盗み食いたことがあり、今のトマトとは全然ちがう青くさかった味が舌の記憶に残っています。駒岡の桃の味も思い出せないだけで、今の桃の甘さとは全くちがった味だったのかもしれない。

それにしても、ずいぶん盗み食いをやったものです。書いていて呆れます。

矢上川の洪水と治水

① 鶴見川流域の市街化の変化

第2次世界大戦後、鶴見川河口部では京浜工業地帯が発展していき、都市部の経済成長も徐々に進んできました。昭和30年頃の鶴見川流域は、自然豊かな環境も数多く残されていましたが、昭和40年頃から市街化・都市化が進み、現在では鶴見川は国内でも有数の典型的な都市河川となっています。

矢上川流域の都市化は激しく、現在は市街化率97%をこえる鶴見川流域でも最も市街化が進んだ地域となっています。

② 洪水と治水の歴史

●江戸時代

丘陵地と台地の間をしながら緩やかに流れる鶴見川は、河床が浅く、川沿いは低くて平らな沖積地が連なっている地形的な特徴により、昔から大雨のたびに洪水・氾濫をもたらしてきました。

●明治時代

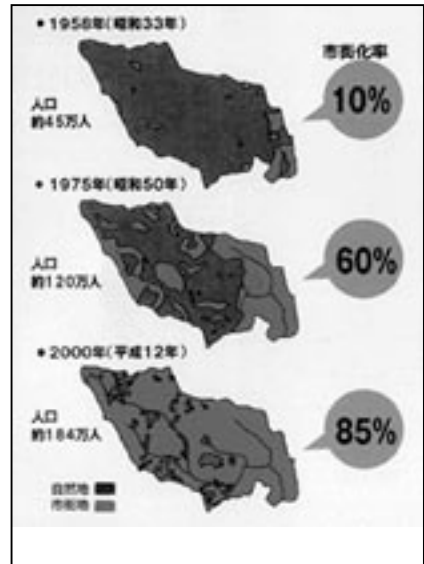
九十九曲がりともいわれた矢上川は、たびたび氾濫をくりかえし、下流の矢上川周辺の地域は水害になやまされてきました。

日吉地区は、台風による矢上川・鶴見川・多摩川の氾濫の影響を受けやすく、明治43(1910)年に発生した二つの台風によって幸区小倉では2メートル近く冠水してしまいました。大正3(1914)年には、多摩川の堤防を整備して欲しいという要求を神奈川県知事に伝えるために、編み笠をかぶった御幸村・日吉村などの村民が鶴見川を渡って直訴をするという「アミガサ事件」がおきています。

●大正時代

大正7(1918)年、曲がりくねった矢上川がまっすぐに改修され、今の形に近くなりました。まっすぐになった川の両側に、池が取り残されていました。

鶴見川流域の市街地の変化



明治14年(1881年)の矢上川

昭和時代の川のお話しを 地域の方にはうかがいました

昭和13(1938)年、大水害が起こり、矢上川橋付近の土手が崩れました。当時、南加瀬周辺は良好な桃の産地で東京まで運ばれていましたが、この水害で桃の木は全て枯れ、これ以降、桃は作られなくなったんですよ。

小学生の頃、鶴見川で魚とりをしてよく遊んでいました。コイ、フナ、ナマズ、ウナギ、ハヤや、モクスガニ、テナガエビ、クロベンケイガニ等がよくとれた。クロベンケイガニを買いに来る人もいたね。

戦時中から戦後にかけて、うちの近くの鶴見川では何年もかけて改修工事をしていましたよ。

古くからの家は、昔から水害に悩まされてきており、土盛りをして家を建てているので浸水はなかったけど、新しく建った家は、その多くが浸水したね。古くからの家は、大水が出た時に避難するための舟を持っていたね。



小学校の頃から友達の加藤茂さん(左)と新堀安一さん(右)。鶴見川に面する南加瀬の辻町にずっとお住まいです。

昭和33(1958)年9月、狩野川台風で鶴見川・矢上川は大水害となりました。

矢上橋付近の堤防が崩れ一面湖のようになり、尻手黒川線を通るバスはタイヤの半分近くまで水に浸かって走っていましたね。…矢上橋のほとりで喫茶店「シンフォニー」を営んでいます。

その時、大学生でした。

佐藤晶一さん

今の矢上橋から下の矢上川は深かったので、あまり子どもらは遊ばなかったね。遊ぶといったら、鶴見川の辺りでよく遊んだなあ。

フナなんかを釣ったね。でも昭和30年代になると、工場排水で川は大分汚れてきましたね。

昭和41(1966)年、矢上川があふれ、近所の住宅が床下浸水になってしまったので、お位牌などを預かったんですよ。矢上川は今より幅も狭く、土手も高くなかった。土手の中にあつた家もあつて、矢上川の拡張工事の時に、うちも川から離れて引っ込んだんです。その頃は八兵衛橋も木の橋だったね。…矢上川のそばに住んでいて、屋号は「川端」です。

松岡貞吉さん



昭和 42 (1967) 年、鶴見川は河口から町田市上小山田町まで 1 級河川の指定を受けました。そのとき、矢上川も宮前区梶ヶ谷まで 1 級河川になりました。その後、急ピッチで川の改修はすすみ、昭和 55 (1980) 年頃、矢上川は現在の堤防護岸にほぼ整備されました。

●現在

平成 3 (1991) 年、矢上川流域の雨水対策として、渋川との合流地点から渋川に向かって 1.7km の渋川雨水貯留管工事が始まりました。都市化が進むと降った雨が地面にしみこみにくくなり、下水や川に集中し川があふれやすくなる都市型水害が増えるので、渋川の地下に直径 10.4m の管を通し、一時的に雨水をためることを目的としています。

平成 17 (2005) 年、鶴見川は全国で初めて※特定都市河川に指定されました。

平成 24 (2012) 年、矢上川の中流、宮前区梶ヶ谷ターミナル下～五反田橋～江川合流点の地下に、雨水貯留地を設置する工事が始まりました。完成は、平成 34 年ごろの予定。

治水のためには、雨水貯留施設を増やしたり、地下浸透をすすめる施策が必要です。

※特定都市河川とは・・・都市を流れる川で著しい浸水被害が発生するおそれがあり、その防止対策が市街化のためとりにくい地域を特定都市河川として指定し、流域水害対策計画の策定、河川管理者による雨水貯留浸透施設の整備その他の措置を定めるもの。

③ 私たちに出来ること

- 雨が降りそうな時、降っている時には川に近づかない
- 川の正確な情報は、以下のホームページで見ることができます
河川の水位や流域の雨量データが見られる携帯電話専用サイト
<http://www.ktr.mlit.go.jp/keihin/m/>
京浜河川事務所のホームページ
<http://www.ktr.mlit.go.jp/keihin/>
- 宅地の雨水浸透を進めるため、地面をコンクリートでおおわないようにして、雨水浸透をはかったり、雨水浸透ますを設置することも大切です
- 雨水貯留タンクなど自宅で雨水をため、活用する工夫をしましょう

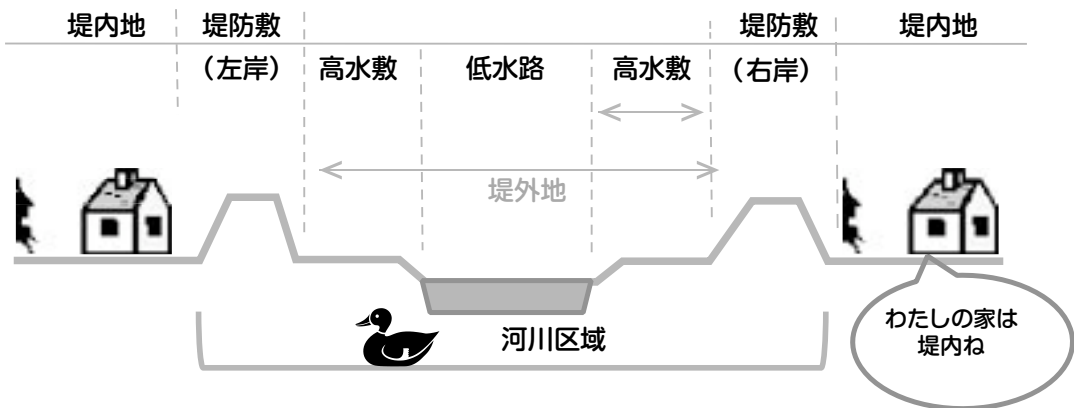


矢上川の治水・洪水の歴史

- 明治 43 (1910) 年 台風により、小倉では 2m 近く冠水。
- 大正 7 (1918) 年 矢上川の工事が行われる。直線の川になる。
- 昭和 13 (1938) 年 矢上川決壊
- 昭和 17 (1942) 年 矢上川改修工事が行われる。
- 昭和 33 (1958) 年 台風 22 号により鶴見川決壊。矢上川周辺も浸水被害。
- 昭和 41 (1966) 年 台風 4 号により矢上川あふれる。
- 昭和 48 (1973) 年 加瀬環境センター (現: 水処理センター) が完成。
- 昭和 49 (1974) 年 ~ 55 年にかけて矢上川堤防護岸工事ほぼ完成。
- 平成 4 (1992) 年 ~ 16 年にかけて渋川雨水貯留管工事が実施。

●川の豆知識

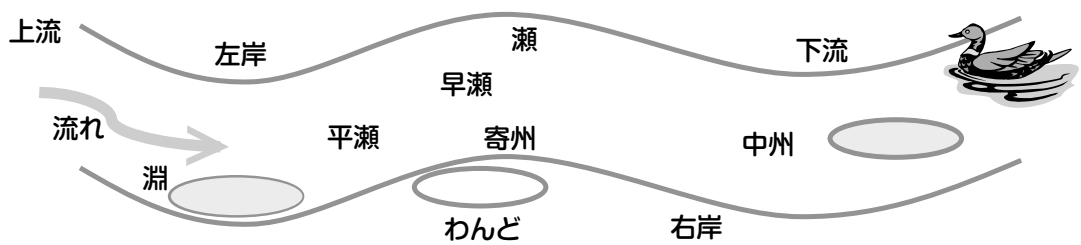
河川の呼び方



- 低水路 普段いつも水が流れているところ
- 高水敷 増水した時に備えてつくられている敷地(河川敷ともいう)
- 堤内地 堤防に守られて人が暮らしているところ
- 堤外地 低水路と高水敷を足したところ
- 河川区域 堤防も含め、河川を構成する区域



川のいろいろな表情



- 右岸・左岸 上流から下流の方に向かってみた時に、川の右側を右岸、左側を左岸という
- 早瀬 流れが速く、水面に空気を巻き込み、白波が立って水底が見えず、そこが主に浮石でできているところ
- 平瀬 水面にさざなみが立つが水底が見えて、底が沈み石になっているところ
- 淵 深く水をたたえて水面がほとんど平らで、普段は流れがゆるく底が砂や泥のところ
- 寄州 曲線部の内側の岸に沿って砂や泥がたまっているところ
- 中州 川の中にある砂や泥がたまって島のようなところ
- 1級水系 国土保全や国民経済に特に欠かせない水系で、国が指定したもの
- 1級河川 国土交通大臣管理区間と都道府県知事管理区間がある

★矢上川の宮前区梶ヶ谷字宅地前～河口は1級河川です。
 梶ヶ谷～渋川合流点は県管理。
 渋川合流点～鶴見川合流点(矢上川河口)は国の管理となります。



矢上川で遊ぶ会 活動記録・受賞歴

●矢上川で遊ぶ会 活動記録

- 1995年 秋、矢上川自然観察会(幸市民館主催)の後に、矢上川のクリーンアップ
- 1996年 4月 矢上川で遊ぶ会結成。毎月1回の定例活動を開始。年4回のクリーンアップ、自然観察会、小学校の環境学習協力。冬の鳥調査スタート
- 1997年 アースデーこどもの国に出展。矢上川の源流探検・ホテル観察
近隣小学校の環境学習協力
- 1998年 矢上川分水嶺調査・矢上川源流「犬蔵の谷戸展」を宮前市民館で共催
川崎市立南加瀬中学校美術部生徒の協力で矢上川の鳥の案内版を設置
- 1999年 矢上川流域マップ完成
- 2000年 野草観察会開催。川崎市公害研究所と生きもの調査実施
- 2001年 月2回の定例活動実施。流域内小学校5校への環境学習協力
第2土曜日 ミクリわんどのクリーンアップと生きもの観察
第4土曜日 矢上川・鶴見川流域の自然観察
川崎市「市町村シンポジウム」で矢上川の活動報告
- 2002年 月2回の定例活動実施。鶴見川水マスタープラン矢上川モデル分科会出席
- 2003年 月2回の定例活動を実施。幸区「さいわいリバーウォッチング」と協働
- 2004年 幸区「さいわいリバーウォッチング」と協働
- 2005年 幸区「さいわいリバーウォッチング」と協働。日吉小環境学習に協力
「市民自治フォーラム」で活動事例紹介
毎月2回の定例活動実施。川辺の看板作成に協力。日吉分館自主学級開始
- 2007年 日吉分館自主学級「見て、触って、矢上川再発見2」
日吉のタカラモノを次世代につなぐネットワーク日吉の「わっ」スタート
- 2008年 日吉分館自主学級「見て、触って、矢上川再発見3」
ウナギ観察会スタート。「矢上橋の立川ロームと旧石器」学習会
- 2009年 日吉分館自主学級「川辺のナチュラルリスト入門パート1」
- 2010年 日吉分館自主学級「川辺のナチュラルリスト入門パート2」
日吉のわっ「タカラモノかるた」完成。日吉タウンホールで活動報告展
- 2011年 日吉分館自主学級「川辺のナチュラルリスト入門パート3」
- 2012年 かわさき市民公益活動助成金を得て、矢上川の冊子づくりスタート

●過去の受賞歴

- 1997年 容器包装美化協会の全国表彰を受賞
- 1998年 全労済の活動助成を受け、矢上川の流域マップを作成
- 2000年 川崎市環境功労者表彰(環境教育)を受賞
- 2003年 コカコーラ環境教育賞奨励賞を受賞
- 2004年 川崎市制80周年記念表彰を受賞
- 2006年 かながわ地球環境賞受賞

編集後記

●矢上川流域では石器時代に始まり現代に至る長い間、沢山の人々がこの川と何らかの関わりを持って暮らしてきました。周辺の遺跡を訪ねたり、文献を調べたりして、昔を偲ぶ事も矢上川の楽しみ方の一つでしょうか。**赤松良紀**

●矢上川は多くの魚や鳥がいたり、野草があることが分かり、都市の中の川であっても自然を身近に感じる場所だと分かりました。また、治水や歴史なども知ることが出来ました。

縄嶋政浩

●まっ赤だな まっ赤だな…カラスウリを見たいと言う。コンクリートに囲まれて暮らす日々では、川遊びは心も体も癒してくれます。**鈴木タキ子**

●こんな素晴らしい冊子が完成するとは思っていませんでした。今までの日常活動を記録に残すこと、あるいは読者を意識した内容を主にする等、議論したが結果的にどうまとまったか、少し不安もある。各担当それぞれによく調べまとめたと思います。たかが「矢上川」という小さな川も見方によっては、これだけ興味があるものかと思いつく思いました。皆さん本当にご苦労様でした。**阿部一夫**

●初めての冊子作りで何度も会合を重ねてとても良いものが出来たと思います。本をつくることは大変な作業でした。今回の機会はいいい経験をさせていただきました。

阿部一美

●私の子どもの頃は、自然の中で育った。今の子どもたちは自然と親しむ機会が少ない。TV、ゲーム、学習塾の毎日。この子達の親の時代も同じだった。「シゼン」「ソト」は怖い、汚い、危ない…。だから高度成長期以降、ソトで遊ばなくなり、ガキ大将もいなくなった。私は、子どもたちに直接ではなく、親にソトでの楽しさを伝え、親が子の「ガキ大将」になってほしいと思っている、この冊子が親子で一緒に楽しめるものになればと思った。**佐原篤**

●頭の中では分かっているけど、それを別の人が読んでみて理解してもらうための文章にするのは非常に難しいことです。今回の冊子づくりで、いろいろと試行錯誤しました。でも、これで本当にみなさんに分かって頂ける文章が書けたのか？**保川一治**

●入会してから1年余、先輩方の長い活動の実績と、自然に対する豊富な知識に感動しました。この冊子が多くの人々に理解され、矢上川が、そこに住む生きものが、そしてこの会が悠々と続いてゆくことを…。**浅野修二**

●矢上川で遊ぶ会の行事が楽しく、地元の方の矢上川に関わるお話し、はなれた所から参加して下さる方々、ベランダから30年矢上川を見ている私は、もっと濃くかわらなければいけなかったのにと、後悔あるのみです。体力的にこれからの参加は残念ながら…。でも応援は!!**井上政江**

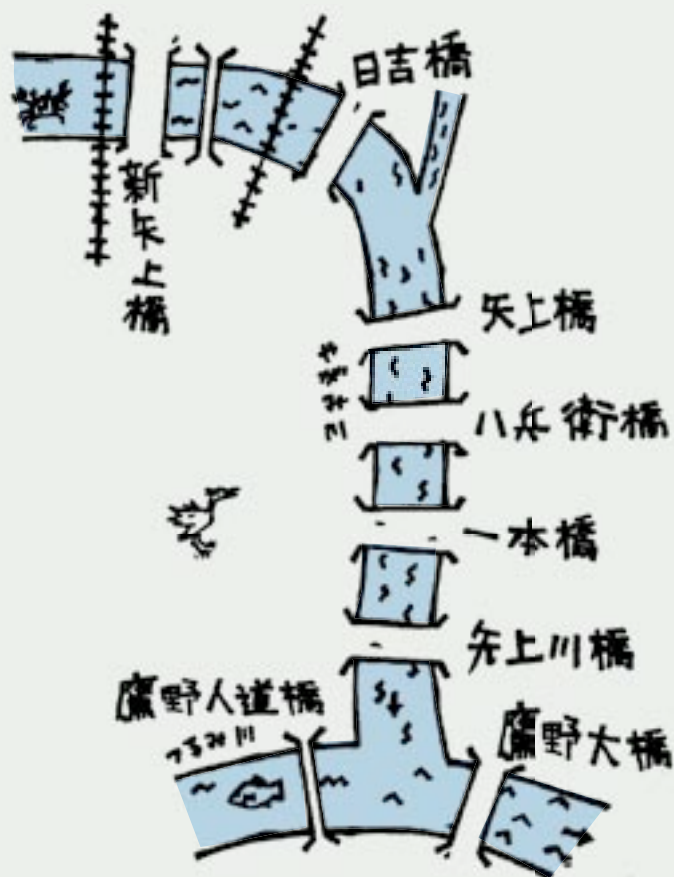
●これまで冬の鳥調査にしか参加していませんでしたが、お誘いを受けて冊子作りに交えていただきました。執筆はしていませんが、編集会議への出席や、「県水堀」の資料調査などをさせてもらい、充実した時間が過ごせました。楽しかったです。

室伏俊明

●とても楽しく描かせて頂きました。絵を描くことは好きですが、人に見せるために描く絵は、とても緊張します。見てくださった方々が、自然や生き物に興味を持つ一助になれば幸いです。

森合崇

●矢上川で遊ぶ会が立ち上がった時を思い出しました。たくさんの方が集まって、毎月活動しよう、遊べる川を取り戻そうと盛り上がった。その後、いろいろな変遷があったなと懐かしく思い出します。16年たって人は変わりましたが、精神は今も変わらない。川辺で過ごす人と時間、そして自然は、とても豊かだといまさらに思います。今までの総まとめとなるこの冊子、みなさまのお役に立てればうれしく思います。**庄司佳子**



この冊子は、2012年度かわさき市民公益活動助成金の助成を受けて作成しました。

発行年月日	2013年3月29日
発行者	矢上川で遊ぶ会
編集委員	赤松良紀 / 浅野修二 / 阿部一夫 / 阿部一美 / 井上政江 / 佐原篤 / 庄司佳子 鈴木タキ子 / 縄嶋政浩 / 室伏俊明 / 保川一治 イラスト：森合崇
連絡先	川崎市幸区南加瀬 5-38-2-705 Tel 044-588-7929 代表 庄司佳子
H P	http://www.web-k.jp/yagami-gawa/